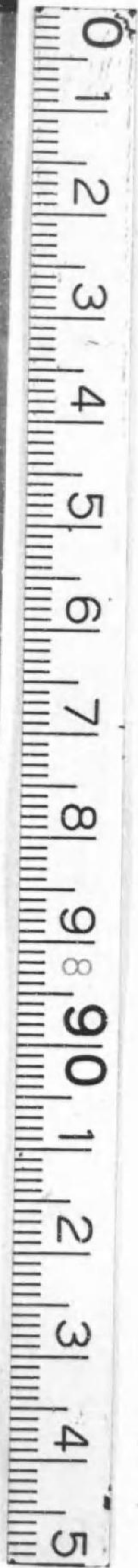


菊池忠誠史

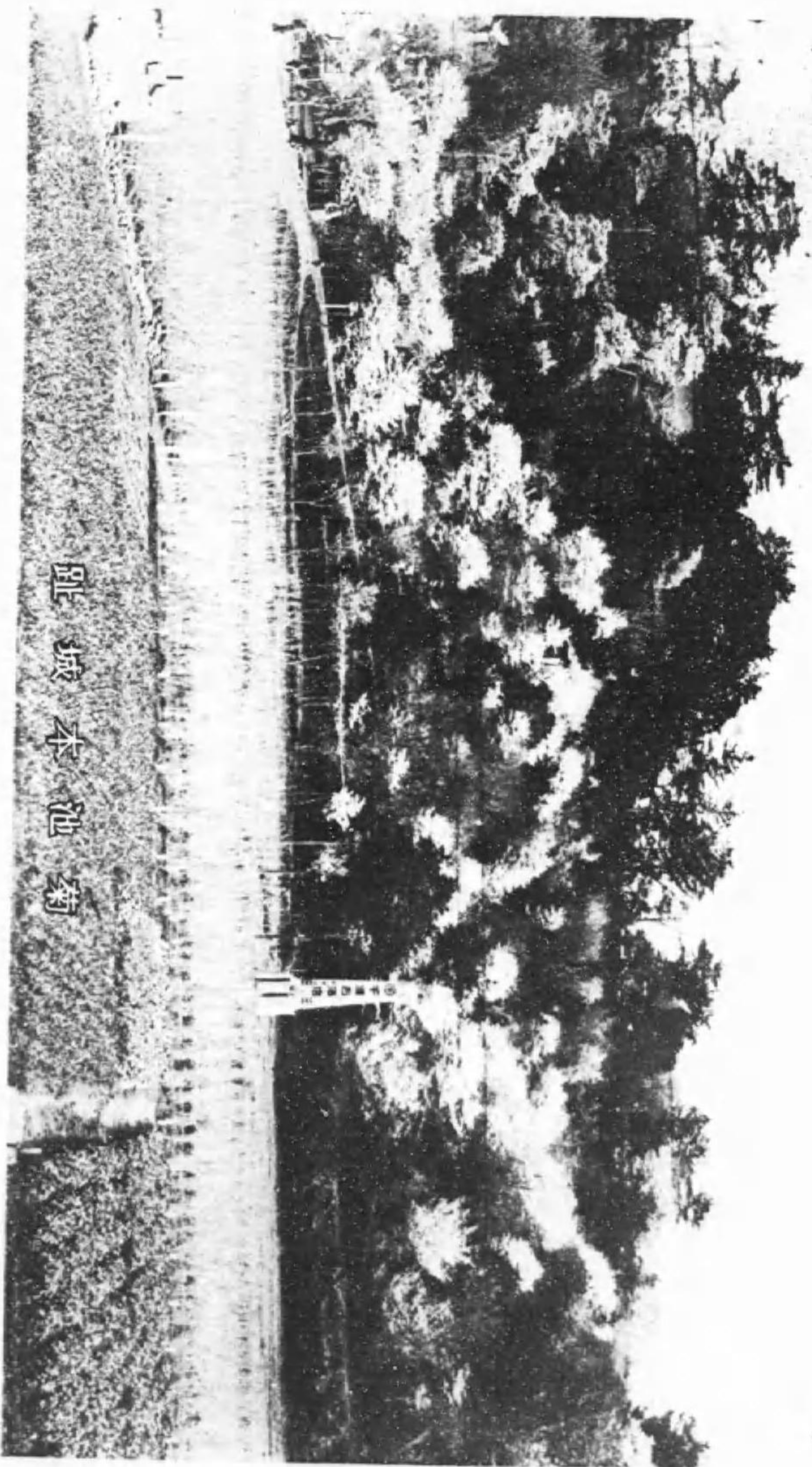
特217

71

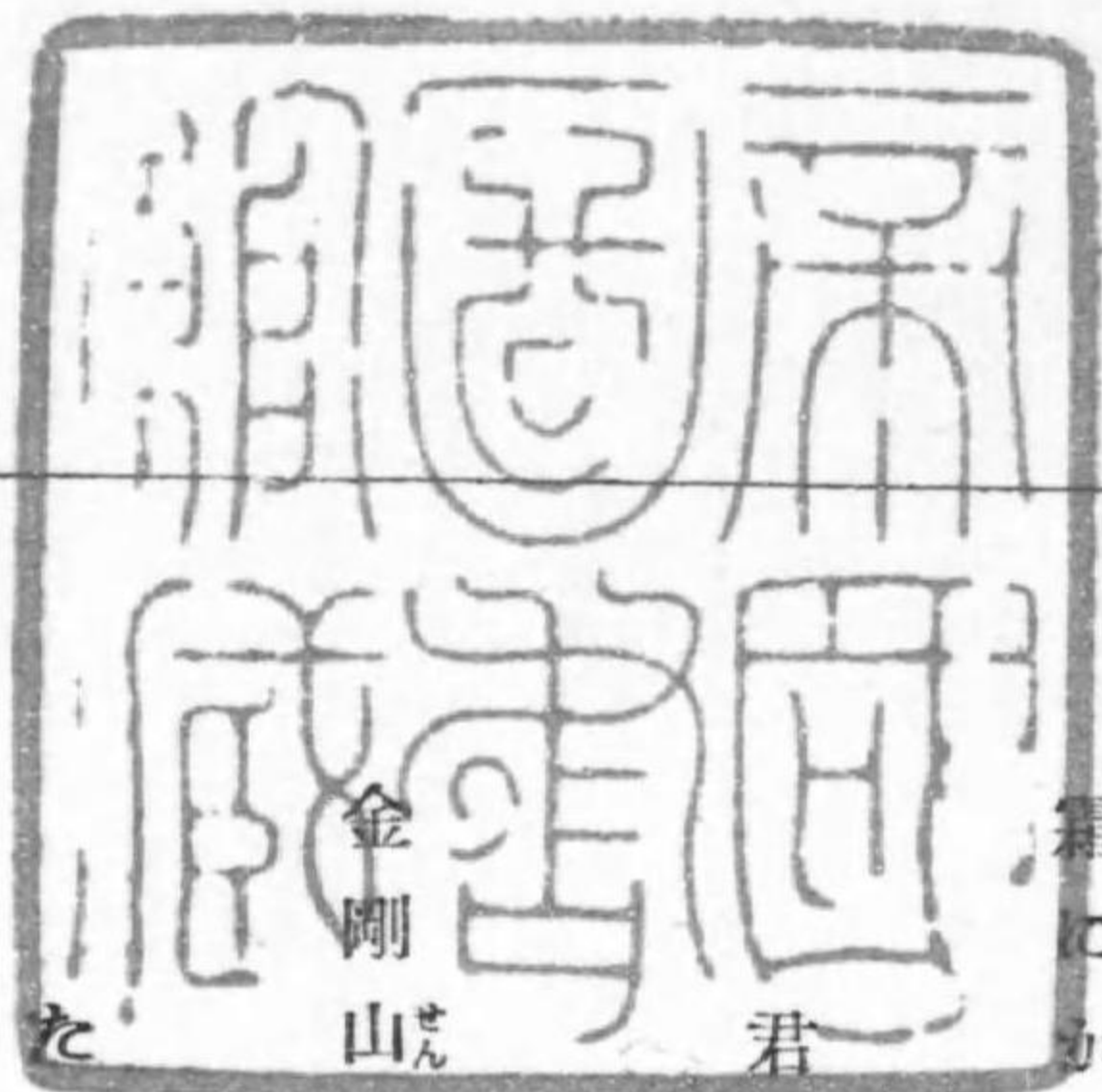


始





距城本池菊



霜に
かれ
せぬ
白菊の

君
を
ま
も
り
し
ま
す
ら
を
は
忠臣義士の鑑なり

金剛山
下
の
楠
木
と

い
さ
を
並
べ
し
菊
池
氏
を
ぐ
ひ
ま
れ
な
る
勳
功
の

歴史かたらんいさ來れ



序

生をこの山紫水明、民風醇厚なる菊池の地に亨け、日夕守山城頭永へに神鎮まります累代の菊池忠魂に額き、その威徳を讃仰しつゝ、修養に精進する事の出来る私達は誠に幸福であります。二十四代悠久五百年の間勤王を家業として終始された我が菊池氏の誠忠こそ古今東西全くその類例を見ざる處であります。

建武の中興の論功行賞の御前會議に於て、楠木正成公が武時公を以て忠孝第一と推賞されましたのも實にもと肯かれる處であります。

慶應四年太政官から肥後藩主に下された御沙汰書に「菊池氏之義は曩祖武時以來累代王室に勤勞し其誠忠臣分の模範相成候段兼々御嘉商被爲在」といふ、いとも有難い御言葉を賜つて居ります。

實に菊池氏は如何なる逆境に處しても敢て一身一家を顧ず、全く没我奉公以て君國の爲め殉ぜられたのであります。而して皆さんの祖先は皆この純忠無比の菊池氏を補佐して忠勤を勵まれた方々であります。皆さんは總てこれ等忠臣の後裔であります。菊池一族が悉く是れ忠臣であつたと同様、皆さんの祖先も皆忠臣であつたのであります。今日の日本の隆昌を來す爲、菊池氏並びに皆さんの祖先は

どれ程大きな役割を果たした事でありませう。

私達は菊池氏を中心とせるこれ等祖先の方々の大恩に感謝しなければなりません。それには菊池氏が天壤無窮の皇運を扶翼し奉つたその忠誠を日常生活に具現しなければなりません。それが爲本校ではその菊池精神を範として、校訓校歌を制定してその實現を期して居ります。

而し私達は菊池氏について余り詳しくは知りません。茲に菊池忠誠史を發行することと致しました。

一同これを愛護する事によつて歴代菊池氏の忠節の實状を知ると共に、益々深く日本精神を体得して未曾有の重大時局に則應する生活を營んで、菊池氏の忠誠に應へまつらんと念願して居ります。

本冊子の編輯はすべて本校教諭松齒先生に依頼致しました。皆さんと共に先生の勞に對して心から感謝致します。

昭和十四年四月廿五日

靖國神社臨時大祭の日

學校長 栗原茂

目次

一、菊池氏歴代記

菊池氏の祖系	一	
一代 則隆	菊池下向	一
二代 經隆	二	
三代 經賴	二	
四代 經宗	二	
五代 經直	三	
六代 隆直	壇の浦波	三
七代 隆定	三	
八代 能隆	四	
九代 隆泰	四	
一〇代 武房	蒙古の嵐 赤星有隆の殊勳	五
一一代 時隆	五	
一二代 武時	武時と大智禪師 武時の擧兵 博多の合戦	九

一三代	武重	箱根の先陣 菊池の千本槍 菊池武敏少貳貞經を襲す 多々良濱の激戦 菊池氏の家憲	一四
一四代	武士	墨染の櫻	一九
一五代	武光	武光と正観寺 武光の隈府入城 征西將軍の宮の御下向 及菊池御入場 菊池の固め十八外城 良成親王の御下向 針摺原の激戦 北九州及日向征伐 筑後の大會戦(大原 の合戦) 太宰府の陥落と武光の卒去	二〇
一六代	武政	高良山の退陣 水島の快戦 矢部の御退隱 託摩原に於 ける菊池軍の奮戦 菊池の落城 武朝の卒去	二四
一七代	武朝		二五
一八代	兼朝		二六
一九代	持朝		二七
二〇代	爲邦	菊池氏の對外運動 玉祥寺と碧巖寺	二八
二一代	重朝	菊池文教の淵原	二九
二二代	能運	島原落 米良の奥地へ	三〇
二三代	政隆	阿蘇の亂 久米原の戦	三一
二四代	武包	傳統二十四代四百六十三年	三二

二、菊池神社記

別格官幣社菊池神社	四
菊池神社創立の事	六
祭神累代の墳墓	六
菊池氏の同姓異氏	九

三、菊池の史跡

官軍墓地	七
内裏尾	七
菊池十八外城略圖	七
月見御殿址	七
孔子堂の趾	七
將軍木及松囃子	七
隈部忠直の墓	七
菊の池	七
駄護地藏	七
輪足山金比羅神社	七

菊池村北宮神社……………五

熊耳山正觀寺……………六

江月山玉祥寺……………六

菊池五山……………六

輪足山東福寺……………七

無量山西福寺……………七

手水山南福寺……………七

袈裟尾山北福寺……………七

四、菊池の傳説……………米原長者……………七

九儀山大琳寺……………六

五、菊池氏系圖……………四

中臣氏系圖……………四

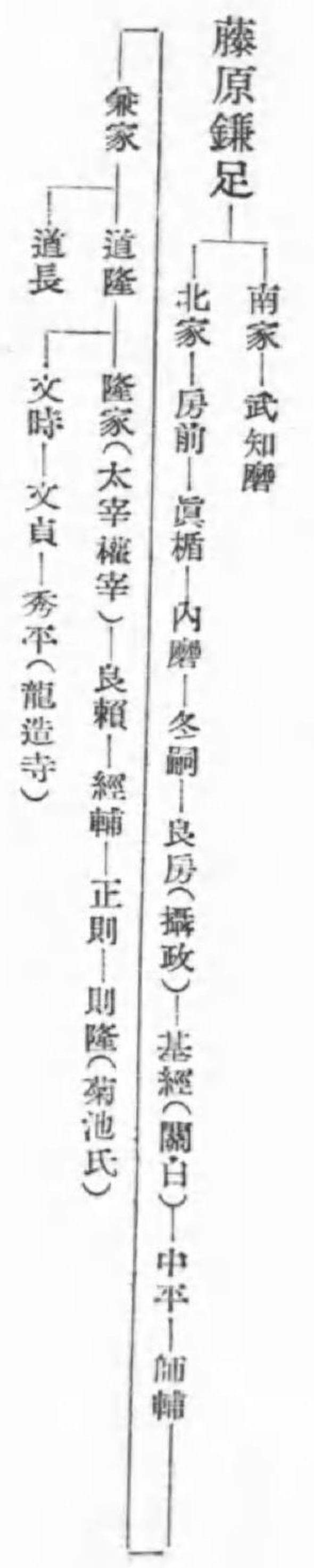
藤原氏系圖……………四

菊池氏系圖……………五

六、菊池氏年表……………五

菊池忠誠史

菊池氏の祖系



一則 隆

菊池の初代則隆公は藤原鎌足より十三代の後裔で後三條天皇の延久二年(紀元一七三〇年)肥後の警固使として菊池郡に下向され深川邑に居城して菊池氏を名乗られたのであります。以後子孫相承けて二

十四代實に四百六十年の光彩ある菊池歴史の端緒をお開きになりました。

當時の居館は菊の城或は深川城とも云つて今も十八外城の一つに數へられて居ります。尙其の附近には則隆公の墓所をはじめ菊池家の厩別當を祀つた駄護地藏や由緒ある菊の池等もあります。

二 經 隆

則隆の長子で父の後を襲いで幾多の政績をお残しになりましたが其の没後は出田邑に葬つて靈は若宮に祀つてあります。

西郷家 經隆の弟政隆は西郷太夫と云つて其の後裔には維新史上に有名な隆盛公を出したのである。現に加茂川村には西郷と呼ぶ一部落も存して居ります。

三 經 頼

二代の經隆には六子がありました。經頼は其の二男で民部大輔と云つて本家を相續しました。

四 經 宗

經頼の子で菊池太郎と云つて父の後を承け鳥羽院の武者所に任ぜられた。其の末子井芹經益は井芹中尾丸の城主で井芹家の祖をなして居ります。

五 經 直

經宗の長子に當る。菊池七郎と名乗つて鳥羽院の武者所に任ぜられました。此の頃から菊池氏の所領は各地に擴がり一族も愈扶植されて其の勢力は漸く四隣を壓するやうになりました。

六 隆 直

經直の子で菊池九郎とも云ふ。

平安朝の末期（治承四年八月）源頼朝が高倉天皇の庶兄以仁王の令旨を奉じて平家追討の軍を起したとき六代隆直は菊池の一族を率ゐて筑前に出で太宰府を焼きしが壽永元年平貞能に菊池城（雲上城）を圍まれて遂に降り。それから平家に従つて上洛し劍璽を守つて忠誓を勵め一の谷や屋島に屢々源兵を憐ましました。安徳天皇を護衛して壇浦に敗れるや隆直の嫡男隆長以下の數輩天皇に殉して海に投じました。菊池氏の皇室中心主義の旗色は是から一層鮮明を加へて來ました。

後緒方惟能が義經の命を受けて菊池城を改むるに及んで隆直は城中に自殺しました（墓所不明）。惟能は進んで山鹿の靈域（吾平山）相良寺に入つて火を放ちました。今相良寺の觀音像が下げて居る首は惟義の首であると云つて居ります。

つくしなる八方が獄の麓にぞ

鬼とりひしぐものゝふはすめ

菊池民の紋所は日足即旭日でありましたが、六代隆直が出陣の折鷹が飛來して二枚の羽根を胃に落したと云ふ吉瑞に因んで、捕鷹羽の紋所に改め、更に違ひ鷹羽をも用ふるやうになつたと云ひます。鷹羽に就て思出されるのは矢筈嶽であります。蓋矢筈を並べた形に似て居り、右の歌も菊池氏の武威を譽めたものでありませう。

七 隆 定

隆直の嫡男隆長や三男秀直は壇浦で戦没したので二男隆定が本家を相續して菊池家七代の當主となりました。

隆定は菊池次郎とも云つて後鳥羽上皇の武者所を勤め承久の亂(承久三年 紀元一八八一)には宇治勢多へ轉戦して忠勤を勵みましたが遂に官軍の敗るゝところとなつて三上皇の遠竄に公郷の流斬。續いて所領の收没となつたのは是非もないことでありました。

八 能 隆

七代隆定には七人の男子が有りましたが長男隆繼は早世したので其子(隆定の孫)能隆が後をつぎ

ました。隆定の二男隆親は片角三部と云つて小山家を興し五男定直は追間村の元居に居城した。此の元居城は今の十八外城の一であります。子末隆益の林原家は最も繁昌しましたが今の打越城趾は其の居所で一族の墓所蛇塚の古墳上には今の馬渡城趾があります。

九 隆 泰

承久の亂後菊池氏の所領を見ますに、一旦鎌倉より没收されました菊池氏の所領は建長二年三月閑院母作られし時御家人の雑掌の交名を鎌倉より京都に具申したので隆泰の頃になつて返附せられました。即築地八十八本の中四本菊池入道跡と云ふことが東鑑に見えてゐます。これは造閑院殿の頃は既に身まかりて其子隆泰の世であつたからであります。

一〇 武 房

元寇に於ける菊池氏の殊勲中第一任者であります。

蒙 古 の 嵐

西暦一千二百年代の初頃から四代凡そ百餘年に亘つて吹き卷つた蒙古の嵐は東は東支及日本海より

北は西比利亞、南は印度、西は伊蘭アラビヤ、土耳其阿羅思（ロシア）はおろか歐洲大半に達して其の猛威は聞くだに戦慄する。

六

近年獨乙のカイゼルが引起した歐洲否世界の大戦も蒙古の其れには及ぶべくもない。

二、飽くことを知らぬ勿必烈は東亞の海に残る小嶋が嶺にさはつたものか朝飯前に平げんものと、文永十一年十月初め戦艦九百隻に兵數凡そ三萬威風堂々と南鮮合の浦（鎮海灣ノ一部馬山浦）を出發した。對馬を侵し（宗助國殉死）壹岐を呑み（平隆景戦死す）海を壓して博多に迫る。（十月十九日）

スハ皇國ノ一大事

太宰府から飛ばした早打によつて馳せ參じた諸國の武士は肥後からは菊池武房、第三郎有隆、同八郎康成、叔父西郷三郎隆政、六郎隆經、竹崎五郎兵衛秀長等一族郎黨引具して博多を指して駆付けた。

九州は云ふに及ばず中國四國の武士も皆集つた河野道有の殊功も此時である。十九日今津の沖に現れた敵の主力は漸次博多灣内に進入し二十日の未明には博多の市外百地原モモジノの沿岸に上陸を開始し先頭部隊は早赤坂の高地に進出した。

雲霞の如く迫り來る大軍の前にはさしにも強き我が兵も先にと進む氣配もない。茲に菊池の勇將武房は此有様を見て猶豫しては一大事と手兵五百餘人を率ひて改め來る敵に馳せ向ひ短兵急に斬り立てたので敵は不意を打たれて狼狽し鹿原（塚原）へ逃ぐるを追撃又追撃!!

此時羣毛の駒に跨りて紫緘の鎧に燃え立つばかりの眞紅の幌をかけた武房の武者振の凛々しさよ。

此時（三つ目結びに旗押立てて）齒け付けた季長は主従五騎羨しげに聲をかける

「そこに渡らせらるゝは何方に候ぞ涼しくも見え給ふものかな」と……向ふの武士は會釋して「肥後の國菊池次郎武房と申すもの。しか仰せらるゝは」と答へた……季長は「同じく肥後の國竹崎五郎兵衛季長敵陣にかけ候御覽候へ」と云ふなり早く敵軍を迫撃した。

見渡せば元軍は雪崩を打つて敗走する。肥後の勇士が群がる敵の大軍を物ともせずにかげ散らし敵の膽玉を挫いた元氣は流石に一異彩で我日本男子の眞面目を遺憾なく發揮して居る。

竹崎勢に追撃された元軍は再び陣を立て直し續々増兵して包圍的に進入して來るので我軍も續々繰り出して壯烈凄慘なる白兵混戦は日没迄續けられた、此時菊池武房は一旅郎黨百餘騎を二手に分ち群る敵に突進し當るを幸薙ぎ立て切り立て斬首五百に及んだ。

味方の損害も甚しく武房の弟八郎康成も數多の敵と渡り合ひ重傷を負て打倒れる。

有隆の殊勳

此戦に赤星三郎有隆は敵將と渡り合ひ一旦は敵の爲に組敷かれたが差添を抜いて下から敵を刺し敵將の怯むに乗じて刎ね返し直に首を截るや鮮血ドツト進り有隆の胄から鎧に注がれた。折しもさし昇

七

る旭の爲に滴る甲冑の血潮は眞紅に輝いて赤い星のやう、何とも形容の言葉がなかつた。聽て菊池勢は殆ど全く戦死し有隆も山なる死骸の中に一時は倒れて了つた。

武房も屍山血河の間に奮戦したが勝敗遂に決せず夜に入つて兩軍退却す。

翌二十一日黎明灣上一隻の敵艦なく志賀島の彼方に遙に一艦の漂泊するを見て捕獲する。

文永の役に於ける第一の殊勳者は武房であつた。

古武士の意氣

三、弘安の再舉以前に於て異國征伐の企圖あるや菊池の一族井芹彌三郎季重は衆に先じて従軍の注進狀を出した「これには飽田郡鹿子木莊内の所領田數や一門の人數、武器乗馬の事を報告し自分は八十五歳で歩行が不自由なれば嫡男越前房永秀以下の人々を従軍せしめ度いと上申して居る而して其の嫡男長季すら六十五歳の高齡であつたと云ふに於ては古武士の意氣がうかゞはれる。

斯くて弘安四年（一九四一）夏の頃十四萬を乗せた四千四百隻の船が我が近海に迫るや輕舟を飛ばして奇襲を試み偉功を奏した。

翌閏七月一日至り夜來の神風一層猛威をたくましくして元艦を悉く顛覆せしめ死者浦を塞ぎ玄海爲に血に染まる。

元寇に於ける菊池一族の従軍者は武房隆政隆經隆頼有隆康成顯秀等でありましたが武房は朝廷より甲冑を賜りしのみで幕府から何等の御賞にあづかつてゐないのは菊池氏が承久の亂以來幕府の感情を害してゐたためで誠に遺憾であります。

爾來春秋六百年大正天皇御即位の大典に際して従三位を追贈せられました。然るに武房の墳墓に就て未だ所在がわからぬので御贈位（従三位）になつても勅令使の立たれるところがないのは誠に残念な次第であります。

隆經は六郎と稱し城氏を稱へて山鹿の城村及菊池郡木庭の城林に居城しました。

一一、時 隆

武房には八人の男子がりましたが嫡男隆盛は父に先だつて早世したので其子（武房の孫）時隆が襲封して十一代の當主となりました。然るに叔父武本は之を憤つて時隆と相刺して死にました（時に時隆十七歳）

一 武時と大智禪師

武時は幼名を正龍丸（假名を次郎）と云ひ兄時隆の横死に遭ひ弱冠（十餘歳）を以て菊池家第十二代を襲封した。夙に文武の道を修め佛學を研究し肥後の出身大智禪師に資縁して京都諸山の僧と親み志を朝廷に通じて竊に勤王の微衷を聞え上げた彼の山鹿郡にある醫福山日輪寺は正和五年（一九七六）武時（二十六歳）の修興に成るものであります。

大智禪寺は守都郡長崎村（今の不知火村大字長崎）に生れ幼名を萬仲と云ひ七歳の時肥後の川尻大慈寺の和尚寒巖の門に學びました。當時の逸話に「そちの名は何と云ふぞ」「萬仲におざります」「幾つぢや」「七つにおざります」「側の饅頭を與へて食ふを見」「萬仲が饅頭を食ふるとない心地がするぞ」「ハツ蛇が小蛇を呑むやうにおざります」「寒巖即智に驚き」「小賢しい奴ぢや出家したら小智と名乗つたらよからう」「嫌でおざります」「寒巖笑つて」「さらば大智と名乗つたらよからう」と云つたら遂に快諾しました。

寒巖寺の前面を幾つとなく往來する舟を指しつゝ大智に向ひ「こゝから彼の船を止めて見よ」と云

へば大智素直に立ちて前面の障子を閉めました。寒巖「手や足を用ひず座ながらにして停めて見よ」と云へば大智は便ち瞑目しました。快哉。

二 武時の擧兵

源氏は三代で政權は北條氏に移りましたので稀代の英主後醍醐天皇は御憤り甚しくひそかに公卿及諸國武士を連れて討幕の御企をなさいましたが不幸にも六波羅に漏れて此の御企では頓挫しました（正中元年）次で再擧の御企も幕府の深知するところとなり遂に關東からは三千の大兵を送つて京都に攻め上りました。

行在所笠置も落ちて元弘二年三月天皇は隱岐へ三親王はそれ／＼土佐、讃岐、但馬の避地へ遷され給ふことゝなりました。

これより先き護良親王は幕軍の追撃を免れて吉野に入り朝敵征伐の令旨をお下しになりました。勤王の志士は各地に起り肥後には稀代の忠臣武時が現れました。武時は武房の孫で（父隆盛は早世し）夙に大智に従ひ佛道を修め諸山の僧と結んで朝廷に通じ討幕の準備に勤めました。

護良親王の令旨をお下しになつて間もなく伯耆の國から天皇の綸旨及錦旗もお下りになりました。斯て風雲急なる秋九州深題北條英時が諸侯を博多に召集しましたので武時は機至れりと一族三百餘騎

を率ひて阿蘇氏と共に肥後を出發しました。

一一

武士の上矢の鎧一筋に

思ふ心は神ぞ知るらん

とは出發前阿蘇宮に詣での詠であります。

武時の一隊が博多へ到着前節田宮の前を通過して居ると其の乗つた馬が俄にすくんで一步も前進することが出来ぬので武時は「如何なれば寂阿の朝敵征伐をお尤めたまふ可き其の儀なら一矢放つて参らせん受けて御覽ぜよ」と三矢迄連射し遂に駒を進めたと云ふ逸話があります。

實に武時の勤王は眞理に基くものでこれを妨ぐるものは神をも射伏すべしと云ふ強い信念の程が窺はれます。

三 博多合戦

元弘三年三月十一日博多に着し翌十二日探題邸に出頭しましたが心意を疑はれて遂に入邸を拒絶されました武時憤然として息濱の營に歸り夜になつて盛な酒宴が開かれました。死だも辭せぬはやり雄に何で斗酒が辭せられやう、殊に武時の二男頼隆は生來の大酒家で舞ひつ躍りつ出陣の間際まで飲み続けました。三月拾三日午前四時博多の各地に火の手を擧げ少貳大友の許にも急使を走らせました少

貳は約に背いて使者を斬り大友も又斬らうとしたので使者は一日散に走せ歸りました。此時武時は錦旗を掲げて軍を督し、節田の濱には磯風に翻る一門の旗を前に軍容堂々と陣を布きました。

押寄せた北條軍を相手に猛烈な戦鬪は開かれる。優勢な菊池軍は一撃の許に破つて探題邸へ突進しました。時英急を拒く能はず將に自殺せんとしましたが偶少貳大友數千を以て菊池軍の後を突くとは是非もない。武時衆寡の敵し難きを察し直ちに嫡子武重を呼んで

「我今北條と戦つて義の爲に死す汝速に菊池に歸つて兵を起し恨を泉下に報ぜよ」と後事を託して

故郷に今宵ばかりの命とも

知らでや人のわれを待つらん

と、切取つた直垂の袖に墨痕鮮に記して故郷の妻子へと手渡せば武重は一緒に御供申さんとすがりましたが「汝を天下の爲に留むる」と嚴然たる父の一言に父訓重しと遂に訣別して肥後へ歸りました。

間もなく猛烈な戦鬪が開かれましたが官軍頗る苦戦に陥り武時は子頼隆以下大射場に於て遂に悲壯な最後を遂げました。

武時の弟二郎三郎は殘兵七十餘名を率ひ猛然として堀を越え城戸を破つて遂に探題邸に闖入し火花をけつて戦ひましたが遂に一人殘らず悲壯な戦死をとげました。

別格官幣社は武時を主神とする。

墓所
元弘三年三月十三日博多に死す（年四十二歳）
 首塚は福岡市外早良郡鳥飼村にあり
 副塚は福岡市外早良郡原村椎木にあり
 昭和八年が六百年忌に當る

一三 武重

時勢は急轉して建武の中興の秋は來ました。武重一統の功により肥後の守護職に任ぜられました。建武二年以後は上洛し中央にあつて正成等と共に忠勤を勵むことになりました。

一 箱根の先陣 千本槍

足利直義鎌倉に反し、武重は新田義貞と共に三萬餘兵を率ゐて箱根に向ひました。そして十二月十一日には手兵一千を以て直義の三千餘騎と大に會戦しました。これより先き武重は將士に命じて竹を切り短刀を着けて敵に突進し遂に奇勝を得た。これが有名な菊池の千本槍であります。（千本槍は今尚物として一節が）凱旋の後肥後の刀工延壽に命じて數多の千本槍を作らしめました。後新田楠木氏等と共に大に京都で尊氏を破り遂に九州へ走らせました。

武重の墓所は隈府町互元東福寺の境内觀起院跡にある老杉の下に龜の跣座ある碑が即ち之であります。

一二 武敏少貳貞經を誅す

尊氏が京都に入つて間もなく、北畠・新田・楠木・菊池・名和の諸將は、之を攻め破つて、京都を恢復したので、尊氏は海を航して西走し、赤間關に着いて、九州の豪族少貳・大友に迎へられてついに筑前蘆屋の浦につきました。

此の時菊池武重の弟武敏は、本國にあつて父の志をつぎ、勤王軍の先驅として現はれ、附近の賊を攻撃し、延元元年二月、阿蘇惟直等と太宰府にある少貳貞經（妙惠）を討つべく筑後に進入しました。少貳貞經は正に尊氏を迎へて、菊池氏と一大決戦を開かんとして居た時でありましたから、武敏が大軍を率ゐて北上すると聞き直ちに諸將を遣はして之を要撃させましたが、却つて敗れて退きました。武敏は進んで高良山に陣したので、貞經は自ら原田、畔倉を先鋒として之を攻撃しましたが、武敏は逆に攻め寄せ、筑前水木の渡しに戦つて大いに少貳の軍を破り、貞經の軍を有智山城に撃退しました。

武敏は手合せの最初に勝利を得て、幸先よしと打ち悦ぶ處へ、秋月種道が兵を率ゐて來應しましたので、頓に其の勢をも合せて、少貳貞經の楯籠れる有智山城に押し寄せました。此の時貞經は味方の多數は、尊氏の許にある其の子の頼尙に従ひ、過半は水木の渡に討たれたので、城に残る者は僅に六

百人にも足らず、とても武敏の大軍に叶ふ可くもないが、要害堅固の城とて、城門を閉ぢ、切岸の下に菊池勢を見下ろして防ぎ戦ふこと數日に及びました。

此時惠良惟澄は、大いに奮戦し、遂に負傷して肥後に歸りましたが、武敏は撓まず屈せず、君の仇なり父の讐、攻め崩さでおかれよかと新手を入れかへ、夜晝十方から攻めかけたので、逃るに道なく貞經は遂に自殺を遂げました。因果の道理は争はれぬもの、菊池武時は先きに博多にて少貳貞經等のために悲慘の最後を遂げましたが、今は貞經が武時の子武敏の爲めに誅せられたのであります。

三、多々良濱の激戦

菊池武敏は阿蘇惟直と共に、尊氏の軍を撃破せんとし、軍容堂々と博多に進軍して、尊氏の近づくを待ち構へて居ました。尊氏は三月一日筑前の蘆屋を發し、軍をさし向けて陸路宗像に向はせましたが、菊池軍の來襲を聞いて、自ら出陣し、香椎社前を過ぎて遙かに遠近の地勢を展望すると、こゝに五十町ばかりの干潟なる多々良濱がある。南端は小川に接し、四方一里は松原で、其の中に箱崎八幡宮があり、東は二三里の間平野連り、西は海に臨んで居る。尊氏は地形をみためて、この松原の間に陣を取り、武敏は小川を越え、松原を背にして鷹の羽の旗風勇ましく陣を布きました。

尊氏は高師直を先鋒とし、大友、島津等の軍を本軍とし、別に少貳頼尙を東方に配して直義の軍を

正面より懸らせました。そこで菊池軍は、専ら敵の少翼を襲撃せんとし、聽て兩刃入り亂れ、大血戦は開かれました。氷軍空を摩し、憂々の音天に響いて物凄。此の時官軍は勢力頗る旺盛、賊軍は容易に敵し難く見えました。義長等は死物狂ひに奮闘したので、官軍も支へ難く、遂に博多須の濱まで追いた。武敏大いに憤激し、獨り麾下の兵を率ゐ、更に北進して敵軍の中に突撃したので、形勢忽ち一變し、足利勢は、殆ど危地に陥つた。そこで直義は死を決して使を尊氏に遣はし、錦の直垂れの右袖を切つて之を贈り「直義防戦仕る間に、早く長門周防に渡り、再舉を圖り給へ」と急を告げた將士等之を見て感激し、死を決して奮戦したので、官軍稍不利の地位に立つた處へ、開戦始めより進みもせず働きもせず、形勢を見て差し控へ、味方について居た松浦神田の諸兵は足利勢のよいのを見て、直ちに旗を巻き胃を脱いで足利方に降服した。味方は減る敵は増す、武敏大いに彼等の不義を怒つて猛烈に戦つたけれども、衆寡敵せず遂に多々良濱の遠干潟を引退き、無念の涙を呑みつゝ、筑後を経て肥後に退いた。尊氏の將仁木義長は、松浦黨を率ゐて肥後に追ひ、玉名の安樂寺、合志の鳥栖原等に官軍と戦つて、殘兵を破り、進んで武敏を菊池に攻めたので城は陥落し武敏は遂に深山に身を潜めましたので九州全土は遂に尊氏の占領するところとなりました。

多々良濱の敗戦によつて官軍退却と共に秋月種道は太宰府に退いて自刃し、阿蘇惟成は、武敏と別路を取つて肥前の小城に迫りましたが賊兵の爲に圍まれて衆寡敵せず、一族以下百六十餘人と共に枕

を並べて悲壯の最後を遂げた。此の時惟直は阿蘇の噴煙を望見す可き地に葬るやうにと遺命されたので、家臣は天山の頂に葬りました。明治四十四年十一月、惟直は正四位を、大正三年十一月、武敏は従三位を、惟成は従四位を追贈せられました。

四 菊池氏の家憲

延元三年七月菊池武重公は寄合内談衆を置き一族合議によつて家憲を制定し爲政の方針を確立して力を民政に注ぎました、これが即今日の立憲政治であります。

- 一、天下の御大事はないたんきちやうありといふもらつきよのたんは武重かしよそんにおとしつくへし寄合衆内談よりあひしゆないたんの事
- 二、國務政道内談こくむのせいとうはないたんのきをしやうすへし武重すくれたるきをたすといふともくわんれい議出
- 三、内談衆統ないたんしゆ一とうせすは武重かきをすてらるへし議捨

延元 藤原
えんげん三年七月二十五日ふちはらの武重判
武重公は當事兵馬倭僊の間にあつても政務に勵み家憲を作りて百年の大計をたてられた大政治家で菊池氏が一門協力して終始一貫の忠勤を勵んだのも誠に故あることと云ふべきであります。

一四 武士

武重卒去して子無く弟又次郎武士が遺命によつて肥後の守に任せられ従五位の下に叙せられました武士は武時の十一番目の子であります

武士は頗る政務に意を用ひ興國三年八月自ら起請文を認め血判して之を神前に捧げました
天罰起請文の事

一、政道の事は衆人の議區々なりと云ふも正道の議を本とすべく假令武士勝れたる議を申すと云ふとも對馬殿、林原殿、島崎殿、須屋殿の一統なくば我が議を捨てらる可く候此人々一統して定められて候議をば敢て破可からず候(以下略)

これは兄武重が定められた家憲の第二條たる政道に關する事を具体的に發表したものであります
武士は深く大智禪師に歸依し、寂照と稱して慈教を受けましたが幼より蒲柳の質で攻城野戰に従事することは思はしくないので父祖の業を失墜せんことを深く憂ひて其職を勇退せんと決心し興國五年

之を奏請して遂に諸國修業の途につかれました有名な墨染の櫻は武士公の詠であります。時に年二十歳でありました。

肥後の葦北郡二見村正福寺は武士が終焉の地であると傳へられて居ります。

袖ふりし花も昔を忘れずば

我が墨染を哀とは見よ

一五 武 光

一 武光と正觀寺

寂河入道の遺兒十數名は何れも忠精凛々氣骨稜々として菊池氏の名をなさしめたものであります。が中にも十郎武光は征西將軍の官を擁して九州を一統し吉野朝後半の盛史をして燦然たる光輝を放たしめた勇將で興國五年武士の勇退と共に菊池氏を襲封し十五代の統梁として肥後の守に任ぜられ從四位の下に叙けられました。

公は父武時が博多に戦死の際は幼少ながらも博多に出陣し父の陣營にありましたが官軍危殆となるや從者は之を博多の正福寺に忍ばせました。寺僧大方和尚は之を匿し戦後潜に菊池に送り届けました

後年武光が大方和尚を請じて隈府に正觀寺を建てましたのも之に因縁が深るのであります。

二 武光の隈府入城

菊池武士は諸國修業の途に上り繼嗣武光は未だ豊田から歸るに至らぬ中に筑後に吉本一族が叛旗を掲げましたので菊池の寺尾八郎をして之を討たせました。

此間合志幸隆が菊池へ押寄せ深川の外城及隈府の本城を改めて之を占據したので武光は直に豊田を發し合志一隊の楯籠る深川の外城を燒拂ひ賊徒二十餘人を討取つて其翌日には隈部城を改落しました陸部城は菊池の本城で今の菊池神社の地であります。

斯くして新進氣鋭の武光は本城に居て一族郎黨に號令し一死君國に報すべき事を誓盟したのであります。

三 征西將軍の宮の御下向及菊池入御

後醍醐天皇叡山に在まして、官軍の形勢日に非なるを御覽せられ、竊に圖つて地方に官軍の勢力を養ひ、その來援を待つて形勢を挽回せんと、諸皇子に大將を副へて、各地方へお下しになりました。殊に九州は重要な地であるから、皇子を差遣され延元元年九月十八日には、綸旨を九州の官軍に下し

皇子懷良親王を征西將軍として派遣せらるべき旨をお傳へになりました。

そして懷良親王は、十月叡山を發して西國御下向の途に就かせられました。御潜行の事とて、僅に五條頼元中院義定以下の十餘人を御從へになり其の御道筋は大和から高野山に出で、紀伊の湯淺港から乗船せられて鳴戸を左にし、由良を右に取つて、瀬戸内海に入り讃岐路を経て伊豫の忽那島に入御あらせられ、忽那義範等の忠勤によつて、三ヶ年間靜かに形勢を觀望せられつゝ、九州征途の準備にかゝられました。

然るに後醍醐天皇は、延元四年八月の初から御病に罹らせられ、玉體日に衰へ給ひ、十五日には御位を皇太子義良親王に譲り、十六日の丑の刻（三時頃）遂に吉野の行宮で崩御になりました。此の飛報により懷良親王を始め御隨行の驚愕如何ばかりであつたでせうか、御西征のこと前途遼遠なのに、この御不幸を見た頼元等の痛嘆は、蓋し想像も及ばぬものがあつたこととせう。

延元四年の末、懷良親王は忽那島から九州に向はせられ、先づ日向灘を経て薩摩に向ひ、興國三年五月一日を以て遂に薩摩の津に着御あらせられ、谷山隆信の居城に御は入りになりました。

征西將軍ノ宮が、漸く南方の外海を廻つて薩摩に入らせられたのは、東北方の沿岸は大友少貳等の勢力盛なるに引きかへ、大隅薩摩の地には三條、肝付、伊集院等皆官軍の味方があつたからでありますけれども根本の御目的は肥後入御でありました。由來肥後の地は、九州の中央に位し、鎮西の統御

に便なばかりでなく、殊に官軍の根據地として累代勤王を勵む菊池氏があり、阿蘇氏も亦勇戦奮闘して武家方の膽を寒からしめてゐるので、薩摩に在ます親王は、千秋の思で肥後への入國をおまちらして居りましたが種々の故障で、終に六ヶ年の長年月を薩摩の地にお過しになりました。

將軍宮薩摩着御により、幕府は肥、筑の官軍を牽制せんと興國四年三月、大友氏泰の軍は、肥後に侵入して鞍嶽方面から菊池城を攻めました。翌月、田原正堅等も、また菊池城に迫つて兩度戦を交へましたが、一向手答はなかつた此の時菊池にては、武重は既に卒去し、武重と共に活動して居た武敏も間もなく歿し、武重に代つて家を繼いだ武士は病弱であり、武光もまだ少年なのでその勢一時甚だ振はなかつた。將軍宮の侍從中院義定は、先發として肥後に來着し、菊池氏と共に太宰府を攻めんと菊池對馬守武茂、大城藤次以下、筑後に侵入して竹井城に據つた。五月十五日、一色範氏は肥前、筑前、豊前の諸族を率ゐて竹井城を圍んだけれども、抜くことが出來ず二十九日激戦があつたが、官軍方は頗る難戦であつた。七月二日に至り、官軍は遂にこゝを放棄し、夜の風雨に紛れて菊池に歸りました。

此の月、阿蘇惟時は足利氏に與して矢部城に據つたので、同族惠良惟澄は直ちに赴き攻めて之を抜き、尋いで惟澄は菊池武光と共に田口、甲佐、立早の諸壘を破り、少貳頼尙の代官鑿庭藏人等の大軍を益城郡砥用に撃破するなど、奮戦大いに力めたので、將軍宮は令旨を與へて惟澄の戦功を賞せられ

ました。

延元以來、惠良重武の皇室に盡せし忠節は、實に大なるもので、武敏と共に大友を攻め、又孤城落日の有様に際しても敢て志を變せず、常に堅忍不拔の精神を以て、或は武重を援け、武茂を保護し、肥筑の野に轉戦し、屢々負傷すれども屈せず撓まず、丈夫の本領を發揮せる點には吾々も、嘆賞せざるを得ませぬ。惟武は阿蘇惟時の兄武國の子であります。

將軍官は薩摩に在しますこと六ヶ年、屢々島津貞久の軍を破られましたが、正平二年十一月、いよ／＼谷山御所を發し、山川津より御乗船、やがて櫻島を後にして海路肥後に向ひ、正平三年正月二日を以て宇土の津に御到着になりました。當時八代にあつた中院義定を始め、惠良重武、菊池武光、内河義眞等の人々は、相率ゐて奉迎し、正月十四日、親王の御一行は宇土津を發して菊池へ向ひ、途上惟澄に縁故ある御船城に入御あらせられ、阿蘇惟に拜謁を賜はりました。惟時は、元弘、建武には自ら出て忠勤し、彼の多々良濱で戦死した惟直惟成の父であります。一兩日御逗留の後、直ちに御船を發し菊池一族の保護を受け、菊池の本城に入りて此所を九州鎮定の御本營とお定めになりました。新進氣鋭の菊池十郎武光が大活動舞臺に將にこれから展開されるのであります。

菊池十八外城

菊池氏は菊池郡全体を以て一城廓となし、隈府に本城を置き其周圍に要塞的十八の外城設けて其の固めとしました。

一、隈府本城

其内最も人工を加くたものは隈府の本城で、或は雲上城、守山城、隈府城等とも云はれ、今の菊池神社の鎮座在す地が即ちこれでありす。

茲は標高一二六米（約四〇〇尺）で大手門を羽手木の四辻地蔵附近に搦手門を戸豐水の牛嶺山に設け、南は菊池川北は迫間川を限り、尙此間南北に各外濠が設けてありました。そして南北朝の頃征西將軍の宮二十年の御本營を始め菊池氏代々の居城となりました。

二、菊の城

菊池村北宮にあり元深川邑の一部で深川城とも云ひ。延久二年則隆公下向の際居を定められ以後數代の居城となる。即隈府本城に對する前衛であります。

三、城林城（止林城）

河原村木庭の西南岳にありす、北は斷崖下に菊池川を控へ西南には數十尋の深谷があつて地形が

最もよく城氏代々の居城でありました。今も毎年四月三日の花時には、部民登上して遺靈を慰めます。

四、戸崎城

戸崎村字今の背後眺望絶佳の丘上にあります。鹿島氏代々の居城でこゝは萬太良城方面の敵に備へたものであります。

五、古池城

花房村出田の南岳にありまして今は宮地嶽神社の所在地になつて居ります。こゝは出田氏代々の居城で前面に菊池川を控へて敵の正面攻撃を免れ得るの地利を有つて居ります。

六、龜尾城

清泉村字龜尾の山林中にありまして、西北に不動岩北に矢筈の眺望をほしいまゝにして居ります。茲は關部氏代々の居城で合志方面の敵を第一次とし鹿本方面の敵を第二次的に備へたものであります。

七馬渡城

清泉村龜尾にあつて城趾は今の古噴地で石棺の破片がところ／＼に露出して居ります。此の城は蛇塚氏の居城で西光寺城と呼應して鹿本方面の敵に備へたものであります。

八、打越城

清泉村蘇崎（俗に錢龜塚）の高地にあります。本城は林原氏代々の居城で臺城と共に鹿本郡方面よりの侵入に對する第一線に當つてゐます。

九、正光寺城（加惠城）

加茂川村加惠の平野にあつて加惠氏代々の居城で前面は迫川に臨み後方に菊池川を控へ現在の城趾は小丘上二三の樹木と周圍に池を繞して居ります。此の城も鹿本郡方面よりの侵入を防ぐ第一線に當つて居ります。

一〇、増永城

加茂川村西郷の東端平野に當り前面迫川に臨む。西郷氏代々の居城で此の城も鹿本郡方面の敵に備ゆる第一線であります。

一一、臺城（水島城）

砦村水島の台地にあり東北一帯八方岳に續き西南一帯田園遠く開け木野川は其の直下を走る要害の地で往昔今川貞氏の軍が菊池武朝の小勢に破られたところであります。

現今も陸軍機動演習に際し屢々防禦陣地として利用せられて居ます。こゝは菊池氏の番城のあつた所で打越との間に馬渡、正光寺、増永の三城と連絡して筑豊軍の侵入に備へたところで菊池氏が如

何に此方面に意を用ひたかを知ることが出来ます。

一二、神尾城

磐村水次神社の西北竹林中に城趾の石碑があります。こゝは水次氏代々の居城で台城の後方援護の位置にあります。

一三、葛原城

迫村市ノ瀬の竹林中に在つて北に八方嶽を控え東、南遠く鞍岳及金峯山を望んで居ます。こゝは市ノ瀬氏代々の居城で主として八方ヶ嶽方面の間道に備へたものであります。

一四、鷹取城

龍門村染土に在つて眼下に迫川を臨み南は雪野の谷に對し天授弘和の頃は將軍の宮の御在城とも傳へられて居ります。此城は原田氏代々の居城で豊後勢の來襲に備へたものであります。

一五、五社尾城

龍門村雪野の奥眞徳寺の廢城の附近にありて城主不明。此城は鷹取城及び掛幕城に連繋して豊後勢の進入に備へたものであります。

一六、元居城

迫村字茂藤里の山林中に在りまして今は只唐濠の跡だけが残つて居ります。此の城は菊池七代隆定

の五男伊倉七郎の居城で掛幕城の後備として日田勢の防禦に備へたものであります。

一七、掛幕城

水源村柏の高原上にあります。東北は數千尋の溪谷を以て塹壕とし西北方に立門川を望むこゝは柏氏代々の居城で専ら日田方面の敵軍來襲に備へたものであります。

一八、市成城

一名奥山城とも云つて居ります。水源村字市成の森林中菊池川と市成川との中間なる小岳上にあります。こゝは年々城番交替にて警固し、菊池氏没落後細永氏が據りましたが狩遊中豊後勢に焼かれ現在は猪鹿の巢窟となつて居ります。

一九、黄金塚城

水源村四町分字塚原の丘陵上にあります。城跡は現今耕地となつて老松の許に石神を祀つてあります。こゝは總谷及び平山兩氏の居城で市成城の後備として阿蘇方面よりの侵入軍に對する第二の防備線に當つて居ります。

良成親王の御下向

正平十六年懷良親王が太宰府に入御以來、御在所を太宰府又は博多にお奠めになり、武光は之を補

佐し奉つて、勢威愈々熾んに、九國の草木爲に風靡するの概がありました。

是の頃に當り、肥後に於ける阿蘇惟村は依然として武家方でありましたが、武光に窮追せられて、阿蘇の山奥深く居を退きて殆んど勢力はなく、無二の忠臣たる惟澄も、この頃既に年老い、十九年の初頃より疾に罹り、遂に九月二十九日を以て卒去しました。思ふに惟澄は、延元の始から終始一貫王事に力を盡した大忠臣で、大小數百戰、毎に寡を以てよく衆を撃ち、屢々創を被り、更に沮喪の色もなく、克く節を全うしたものであります。惟澄卒した後、親王は直に次子八郎次郎惟武に遺跡相續の令旨下され、大宮司職を繼がせになりました。明治四十四年惟澄は正四位を、大正四年惟武は從三位を追贈せられました。

正平二十二年五月二十八日、五條頼元も又七十八歳を以て卒去しました。回顧すれば、頼元は、過去三十餘年間、親王に咫尺して御養育申し上げ、或は薩摩の邊境に、或は九州平定の征途に出で、幾多の艱苦を嘗め、帷幄の間に參し、九州平定の基礎を固めたもので其の勳功と伎倆とは、中央政府にあつた北畠親房にも比すべきものであります。

親王は、豫ねての御素志である東上の御計畫を御實行になりましたが、九州は、なほ武家方の者もあるので、御東上につき後顧の憂を絶たんが爲、別に征西將軍ノ宮の御差遣を吉野に要請になりましたので後村上天皇第六の皇子良成親王の御下向といふ事になりました。

時に正平二十二年十二月、將軍義詮は疾みて歿し、僅に十歳の春王丸が名を義滿と改めて後を繼ぎましたので、親王はこの機逸すべからずとて、こゝに東上の軍を起して、中國に討ち入らうとしましたが中國、四國には勢力ある足利方の細川氏や大内、大友等があつてこれ等の爲に阻止せられ、遂に目的を果し給ふことの出来なかつたのは誠に遺憾であります。尋いで良成親王は、九州から四國にお渡りになり、伊豫に御滞在中河野氏に奉ぜられて、四國平定の御任務を盡させられ、御經營は次第に進んで参りましたが時に後村上天皇崩御になりました宮方不振の爲め、良成親王は再び九州に還御せられました。

針摺原の激戦

武光の目覚しい活動は正平八年二月に於ける筑前針摺原の戦に始つて居ります。始め少貳頼久官軍に降り一色範氏再び賊軍に應じた際範氏は子直氏をして頼尙を古浦城に追及せしめましたので頼久は急を告げて武光に援を求めました。武光は一族城、赤星、鹿子木、安富等の兵を率ひて頼久を援ひ二月二日太宰府の南針摺原に達し大に一色軍を破り賊將原田貞廣以下の數將を屠りました。

一色軍の敗戦は薩摩に於ける官軍の蜂起を促し遂に九州に於ける朝野の形勢を一變せしむるに至つたのであります。

少貳頼久は古浦城に於て既に危き一名を武光から救はれましたので大に感謝し今より後子孫七代に至るまで菊池に向つて弓を引き矢を放つことあるべからずと熊野の守札に血を絞つて起請文を認めこれを武光に捧げた程でありましたが數年ならずして又賊に投じて了ひました。

北九州及日向の征伐

其後正平九年八月武光の兄菊池武澄は肥前の島原に渡り多比良城を攻めて九月之を落し正平十年九月一日小城城を改めて千葉氏を一撃し十月二十五日豊後に打入りました。

扱而懐良親王の北征には武澄主として之に當り武光は南征して島津氏を歸順せしめ正平十三年十一月自ら手兵を率ひて日向に入り短兵急に直顯を破り更に三股城を降し十二月二日志布志に来て大慈寺に兵士狼籍の禁札を掲げ再び菊池に凱旋しました。

筑後川の戦

大原合戦(一)

小貳氏は九州北部でも有名な豪族で菊池氏にとつても侮るべからざる大敵でありました、然し武光も武勇絶倫の英豪で尙父武時が博多灣頭の一戦に少貳氏のために戦死したのでありますから其報讐の

爲にも此強敵をくちかればならぬ。殊に懐良親王は既に御年齢三十左右に達し、剛毅の御氣象は益々盛で自ら三軍を叱咤し朝敵少貳頼尙を討滅せんと思召し、茲に一大決戦の準備は全く整ひました。正平十四年七月官軍は軍容堂々と蝦くが如き炎暑を冒して菊池を發し、筑後平野に進出して高良山、柳坂、水繩山の三ヶ所に陣を布きました其の勢は實に四萬餘騎と云はれて居ります。

今や兩軍十萬の貌貅筑後の大平野に相會して悲風慘膽劍電血雨の大原大合戦所謂筑後川大激戦は將に展開されんとして居ります。

時は正平十四年七月十九日、武光は手兵八千の中五千騎を決死隊とし武光自ら之を指揮して夜陰に乗じ筑後川を渡つて進軍しました、其の時味坂庄に陣した頼尙は全軍に令し三十餘町を退却して大原に陣を布きました。抑も大原は大保原、小郡野、山隈原間を併せた茫邈たる筑後川の六平野で、西は肥前に連り、北は筑前に界して大振山一帯の高地を負ひ、南は筑後川を隔て、高良山の連山を望み、太宰府の奥に發源する寶滿川は帯のやうに流れ來つて此平野を抱擁し遂に筑後川に注いでゐる。筑後川を渡つた官軍は直ちに前進をつゞけやうとしましたが敵は多くの深沼を要害として官軍の來襲を防禦し而も沼中に通ずる道路を三ヶ所も切斷してゐたので兵を進める事が困難であります。武光は沼邊に來て沼を隔て、敵陣を望見すれば堂島から高樋に亘る高地線には少貳氏の四ツ目の旌旗國々の諸將の旗印は天を覆ひ其陣形は整頓し、西北遙に大保原方面を視れば數萬の敵兵軍容堂々として陣を布き

全長一里餘に亘つて居る。されば地形と敵狀に留まる事として續いて官軍の本隊も筑後川を渡渉して來ましたので本營は宮瀬に置き、第一線は岩田庄から福堂原に亘つて布陣し茲に兩軍對陣の姿となりました。兩軍の對陣は曠しく月を越え、兩軍先頭の間隔は甚だ接近して旗の紋さへ鮮明に見る事が出来る。武光は頼尙を辱めやうと思つて金銀の日月を打のた旗の蟬本に一紙の起請文を附して敵に示しました。是は嘗て頼尙が古浦城で既に一色軍の爲に撃たれやうとした時武光が援軍を率ゐて此危難を救ふたので頼尙は大いに感謝して熊野の守札に血書した誓詞でありました。斯くて武光は日夜敵情を偵察して策戰大に力めたのであります。

大原大合戦 (二)

機は正に熟した。武光は頼尙に對し一大決戦を試みんとて、先づ策を定め「夜半騎兵を以て敵の背後に廻し、一方には本隊を以て敵の先陣を夜襲して腹背相應じて敵軍を騷擾せしめ直に敵の中堅に向つて激烈な攻撃を開始する」の計畫を立てました。

八月六日夜半、武光の選拔せる三百の騎兵は夜暗に乗じ蕭々として岩田の陣地を發し、寶滿川を辿り、竊に敵の背後なる横隈附近に達し、百騎宛の三隊に分れ所在の地物に身を潜置して我本隊の三聲の起るを今や遅しと待つて居ました。本隊は八月六日午後十一時頃から運動を起し、武光の甥片保田三郎武明を先陣の大將として先頭に日月を打つた軍旗を高く捧げ二千餘騎の士卒鎧袖相摩しつゝ前進

すれば、第二陣は同じく武光の甥菊池孫次郎武信及び武光が母方の従兄赤星掃部助武貫の率ゐる千五百騎、第三陣は大將菊池武光の率ゐる四千騎、第四陣は懷良親王の自ら指揮せられた三千餘騎、第五陣は新田一族の二千餘騎、右翼隊は八代の名和、玉名の太野、筑後の溝口等の率ゐる五千五百騎、左翼隊は同じく新田一族の一千騎、蕭々として小郡野に布陣せる敵の第一線を包圍すべく前進する。扱も敵の背後に迂回した騎兵部隊は潜かに我先陣の接近するを待つ中其の一部は早くも敵の巡邏に發見せられたので俄に起つて喊聲を揚げ火を敵陣に放ち猛烈に突貫した。敵軍は大に狼狽し、混亂喚叫、同志互に格闘せる其の中を我騎兵部隊は徐々に縦斷して南進し、我第一線部隊に到着しました。

敵陣は混亂其極に達し、同志討の爲に三百餘人の戦死者を出した。敵の騷擾に乗じ官軍の先鋒菊池片保田三郎武明は二千餘騎を掲げて驀然として敵の先線に接近し、突如に喊聲を揚げました。敵の先陣は松浦黨及び原田、高市の諸兵七千餘騎を以て組織してゐましたが元來弱兵が多く、爲に官軍の夜襲を見て大いに周章し、直ちに退却を始めました。此の時官軍の右翼隊は松浦黨の後方にある沼澤を渡渉して突貫して來ました。此沼澤が淺くして渡渉の容易であることは豫て偵知してゐたのであります。敵は側背から攻撃せられて益々狼狽し、數多の死傷者を遺棄した儘、本陣に向つて退却しました。其際方位を失し各所に散在せる深沼に落ちて溺死したものは數へ切れず、既にして夜はほのぼのと明け離れ臚げに彼我の旌旗を認むる事が出来る。菊池武明は直ちに進んで敵の前進隊の本陣に肉薄

しました。少貳新左衛門武藤は之を見て兵六千を三隊に分ち、武明の軍を包圍して來ましたが、武明も屈せず其主力を目蒐けて斬込んだので、敵は其勢に怖れて敗走しました。本陣にあつた頼尙が子息新少貳直資は之を見て大に怒り、手兵二千餘騎を率ゐて馳せ來り、武明の軍に突撃しましたが、事急にして直資の陣形は次第に亂れ、武明は縦横無盡に之を粉碎し、官軍の武將玉名郡木葉の宇都宮隆房は松浦吉種、佐志將鑑間を斬り倒し敵の將卒は多く戦死し、敗殘の兵は潮の如く退却を始めました。直資齒齧みして「言甲斐なき味方の奴原かな、引返して我と共に戦へよ」と呼號し、駿馬に鞭つて進んで來ました。此時直資の左右に従ふるもの纒に三十餘騎、衆寡遂に敵し難く直資は遂に宇都宮隆房の爲に首を打られました。

大原大合戦 (三)

少貳直資の死を見て勇將朝井但馬將監胤信、筑後新左衛門頼信、窪能登太郎泰助、肥前刑部泰親等は三千餘騎を督して菊池武明が軍の側面から猛然として突入して來ました。奮撃亂闘見る／＼官軍では武明を始めとして、城越前守、加屋兵部大輔、見參岡三河守、庄美作守、國分行喬以下一族郎黨百十餘騎壯烈な戦死を遂げました。爲に先陣の進撃は一頓挫を來して了ひました。

第二陣にあつた菊池孫次郎武信、赤星掃部助武貫の一千五百餘騎は頼尙が甥太宰頼泰等が固めた陣地に向つて進撃しました。敵は二萬餘騎を十八隊に分ち魚鱗に備へ、即ち味方の十數倍の大敵であ

る。武信は先づ手兵九百を率ひ、武貫は手兵五百を以て前進し、兩隊白刃を翳して大軍中に突入しました。頼泰は逞兵五千餘騎を以て善く戦ひ、兩軍入亂れて劍電血雨の白兵戦を演出し、武信が乳人岡上左馬助は頼泰と格闘して遂に之を生擒し、官軍は赤星掃部助武貫、松田丹後守、結城右馬頭親明、加藤判官宗高以下三百餘人戦死し、少貳軍は饜庭右衛門藏人重高、山井三郎惟則、宗左馬太郎宗邦、木綿將監特有等の勇將猛卒七百餘人枕を並べて討死しました。

懷良親王は遙に兩部隊の状況を見て事容易ならざるを察し、駿馬に鞭つて自ら陣頭に立ち、頼尙の本陣に突入せられました。敵の諸將は之を見て「將軍出たり將軍出たり射て落せ」と呼ばはりつゝ鏃を集めて散々に射る。頼尙も士卒を勵まし「今は將軍は釜中の魚なり早く討つべし」と采配を振つて陣頭に立ち、松浦、日下部、山鹿、島津、澁谷等の兵二萬餘騎を左右に分ち親王の軍を包圍し雨霰の畑く連射せしめました。賊將堀井常陸之助冬綱善く戦ひ、二千五百の將卒を麾いて親王に薄る、冬綱の臣芳賀五郎房則親王を射る、矢親王の左脇に中る、親王は鮮血淋漓尙も身を挺して奮戦せられる程に御馬さへ遂に射倒された、賊兵此状を見るや士氣益々百倍し、親王を捕へんと蝟集し來り、一兵進んで親王の左肩を斬る、宇都宮隆房時に年三十一、親王の御側に驅け來り近づく賊と格闘して死し、賊はいよ／＼肉薄する、御痛はしや親王は三ヶ處の太刀創を受けさせられ、危きこと甚だしく、左右にある日野左少辨、洞院權大納言親弘、坊城三位有氏、花山院四位少將基直、春日大納言興文、北畠

中納言信親、北山三位中將、土御門右少辨、高辻三位、葉室左衛門督惟言等は悉く敵刃に仆れ、御側の將士次第に僅少となり、加ふるに疲勞其極に達し、最早刀を揮ふの力なく、皆親王を圍繞して鎧袖を翳し、僅に流矢を防ぎ、身を以て白刃を支ふるに止まり、將軍の官の運命は恰も風前の燈火の如く、武光亦大軍に阻止せられて親王を援ふことが出来ず、如何はせんとする所、忽ち西方から一千餘の人馬が驀然として殺到して來ました、官方は賊軍の増加せるものと思ひ、親王も亦自殺を決心なされましたが、焉ぞ圖らん此の一群の人馬は官軍の左翼部隊たる新田一族の一千餘人で敵の右翼を驅逐中、親王の危急を見て、俄かに方向を轉じ、敵の背後から突入して來たのであります。見ると親王は危機一髪の場合であらせられるので、新田一族は白刃を以て戦ふの邊なく徒手にて親王を包圍せる賊軍と格闘し、命を限りに奮戦し、爲に新田一族中世良田大膳太夫、田中彈正大弼、岩松相模守、桃井右京之亮、堀口三郎、江田丹後守、山名因幡守等は茲に壯烈な戦死を遂げ親王は僅に一道の血路を開き一時福堂原に退却し、傷を包んで谷山右馬介義高及び近臣數人に護衛せられつゝ草野の谷山城にお這入りになりました。

此の戦に戦死した片保田三郎武明、赤星掃部助武貫、見參岡三河守高子、庄美作守忠益、國分二郎行喬、加屋部大輔、宇都宮刑部丞隆房、松田丹後守は別格官幣社菊池神社に配祀してあります。

大原大合戦 (四)

菊池武光は、懷良親王が重傷を負ふて退却せられ、左右諸將朝臣多く戦没し、新田一族も亦多く瘡れたのを聴き、奮激して曰く「最早一兵も生還すべからず、日頃の約束に違はず我に伴ふて討死せよ」と怒號しつゝ馬上に太刀を振り翳し、自ら士卒の先頭に立ち、嫡子二郎武政之に續き四千餘の菊池勢も必死となつて群がる敵中に驅け入りました。少貳勢此状を見て武光父子を射落せと鏃を揃へて猛射し、武光矢を被る事蝟の如く、而も其鎧甲堅牢にして裏搔くものは一矢もなく、乗馬は射倒さるるも他人の馬に乗り替へて進み、馳突縦横血戦十七合、向ふ所草を刈るが如し。暫らくして武光が冠れる兜は射落され、髻切れて被髪面を覆ひ、群り來る敵兵の爲に小鬘に二刀を受け鮮血淋漓として面に濺ぎ、目背裂け凄じき形相言はん方なし、少貳武藤遙に之れを見て「スハや武光は深手を負へり、生擒るは此時にあり」と單騎武光に肉薄し來り、大手を擴げて掴みかゝる、武光馬上に於て格闘し、俱に墜ち、忽ち武藤の首を斬つて鋒先に貫き、其の兜を取つて之を冠り、其の駿馬を奪うて之れに跨り大聲を揚げ「菊池肥後守武光は少貳新左衛門武藤に天誅を加へたるぞ、主將の爲に弔ひ戦はんとするものは速かに來つて勝負を決せよ」と呼號しつゝ忽ち馬を躍らして頼尙の陣地に向つて突入した、爲に官軍の士卒勇氣百倍し、縦横に斬立てる、少貳頼尙此状を望見して大いに驚き、先づ花立山に據るに決し、馬首を東に向くるや四萬餘の大軍は主將退却するものと誤認し、茲に總敗軍となり、潮の退くが如く退却を始めました、其の混雜甚だしく、先頭に退くものは、後方から退却する友軍を敵の

追撃し來るものと見て、周章狼狽、沼中に陥つて溺死するもの算ふるに邊がない程でありました。

武光、武政は官軍諸隊を集結して追撃に移り少貳軍の大集團は馬市方面に潰亂し、大將頼尙は僅に二十四騎を左右に従へ寶滿山に向つて退却しました。武光猶追撃を續行せんとするも、部下の損害多大なるを見て爰に追撃を止め、山隈原に貫流する小川に至り、血刀を洗ひ、諸軍を収めて高良山に歸陣し、尋いで根據地隈府に凱旋しました。

此の日の戦は八月六日夜半から始まつて巳の下刻即ち午前十一時に至り約十時間の戦闘で死傷者實に二萬五千人を算する、其中官軍の戦死者は將軍宮の近臣十二人菊池一族十八人其他千九百餘人、負傷者一千餘人、賊軍の戦死者は少貳一族二十八人其他四千人、負傷者實に二萬八千餘人三里の曠野伏屍堆積して滿目慘狀目を蔽はしめたといふ。今に残る大將塚、千人塚、五萬騎塚等は其際の戦死者を埋めたものであると傳へられて居ります。蓋し九州には幾多の戦亂がありましたたが九國の大小名が率ゐた十萬の大軍が一平野に會戦したのは此大原合戦所謂筑後川の戦ひのみであります。

大原大合戦 (五)

世上に大原合戦を筑後川の戦と稱するのは歴史の誤傳と地理に委しからぬ爲誤られたもので、實は筑後川の支流太刀洗川及び寶滿川(古文書の床河)の流域に行はれたもので、東は三井郡太刀洗村山隈高樋の邊から、南は太刀洗村下高橋御原村用丸小郡村福童に及び、西は肥前三養基郡田代村秋光川

の邊に至り、北は三國村西島に亘る一帯の地である。尙此戦を木屋文書、龍造寺文書、得永文書には皆大保原御合戦と記し、志賀文書、太平記、大日本史、日本外史等には大原と書いてあります。大原とは大保原、小郡野、山隈原等を含んだ平野の總稱でありますから今日では大原合戦と稱したが適當であらうと思ひます。

太平記、大日本史等は大原合戦の月日を八月十六日と記してありますが、時の記録たる龍造寺文書、得永文書、高木文書(以上少貳方文書)、木屋文書(菊池方文書)等に悉く八月六日と記してありますから無論八月六日が眞である。殊に十六日とすると滿月の頃で夜襲に便でない、因に八月六日攻撃當夜の月齢は

月出 午前十時五十九分

月入 午後八時三十六分

となる、即ち弦月西山に沈んだ後官軍は行動を開始したのである。懷良親王の射創及太刀創(當時長刀に因る切創を太刀創といひ、短刀に因る刺創を加多那創と云ふ)は頗る重傷であらせられたものと見えて鎮西要略には親王は大原役に於ける御負傷の爲、肥後柳坂に於て薨去せられたとし、本朝通鑑には親王肥後に歸へり創を病んで薨すとの噂を録し、菊池合戦記には御歸陣の後、八月遂に空しく成り給ふて御傷死を是認して居る程であります。現に大原合戦御負傷の際谷山(新田)右馬助、親王の

御供を承り、御身を白木綿にて巻き筑後水繩山の谷山城に至つて介抱しましたが、遂に八月十八日に至つて城内に薨去せられ附近なる柳坂千光寺（山本村宮園）に葬り奉つたと云ふ誤説さへある程であります。

古來南筑の地を踏み正平己亥の昔菊池武光が馬を清流に止めて血痕淋漓たる軍刀を洗ふたと稱する太刀洗川の邊を過ぐるもの覺えず其故事を追想して無限の感慨に討たれ吟腸を刺激し咏嘆の聲を漏したものは尠くありません。殊に頼山陽の長吟三十六韻は、後代人口に膾炙し、爲に幾多の人をして、血湧き肉躍り彼の少武、大友の肉を喰はんと感起さしめ、尙明治維新の鴻業にも影響したものが少くないと思はれます。

太宰府陷落と武光卒去

九州の諸族が次第に今川軍に参加し太宰府も征西府も次第に危殆を加へました。了俊は佐野山に陣を移して之を攻圍し五月より六七月に至り周密なる用意を以て攻撃を加へました。

文中元年八月四日菊池武安は仲秋を酒見城に攻め日夜激戦を繼續しましたが遂に敵する能はず太宰府に走り有智山城に楯籠りました。仲秋は之を追つて今川軍に加はり八月十日太宰府の總攻撃を開始しました。

太宰府は親王を始め武光武政等も在城し之を敵手に移すは官軍興廢の分るところで必死の防戦に力めましたが賊勢益加はり十日には天山城陥り十一日には有智山城陥り十二日には哀れ太宰府も今川軍の手に落ち菊池武政は懷良親王を奉じて高良山に走りました。

思ふに正平十六年八月征西府を此に設けられてから十二年九州官軍の威武は南北朝時代の後半史に燦たる光を放たしめましたが機智縦横なる今川了俊の爲に鎮西の最中心地を奪はれたのは時勢の轉變とは云へ實に惜みても餘り有ることでありませぬ。

八月十日十一日十二日の戦鬪は餘程の激烈を極めたもので其後に於ける菊池の軍機は一切武政の統べしより見て或は武光は此戦に壯烈な戦死を遂げられたのではないか？ 或は太宰府陷落の翌年即文中二年十一月十六日とあることより見ると病死らしくも思はれる。

一六 武 政

文中元年八月太宰府陷落後懷良親王は筑後の高良山に退いてこゝを官軍の策源地と定めました。高良山は標高僅に五百尺に過ぎない小峯でありますが兵家の要地で武政及武安以下こゝを本據として策戦を計畫し敵の南下を阻止する一方豊後と連絡して太宰府の恢復を企てました、今川了俊は子義範をして阿蘇氏と結びせ又日薩偶とも連絡して官軍を衝かんとして計畫を進めました。

文中二年二月十四日武政武安は夜に乗じて筑後川を渡りて本折に進み四月隈城の敵を衝きましたので兩城危殆に瀕しましたが毛利元春の援によつて僅かに陥落を免れました。

武政は當時の難局を引受け自ら陣頭に立つて奮戦し軍容大に振ひましたが了俊の策略が着々功を奏するに及んで官軍の形勢は非となり將士は離散して勢次第に熾まつて來ました。

了俊は益進略の歩を進め文中三年四月三日菅生に陣し部下をして生葉村に進入續いて放火せしめました。菊池軍は直に出動し終日の撃戦によつて之を撃退しましたが其後も交戦は日々に繼續せられましたので武政は遂に重傷を負うたため高良山の陣營にて病臥し五月二十二日には郷里の正觀寺に辭命を送つて後世の菩提を祈念し二十六日三十左右の壯齡を以て父の跡を追うて陣歿しました。

一七 武 朝

高良山の退陣

文中三年五月武政が高良山にて陣歿の際嫡子賀々丸は僅に十二歳の少年で父に従つて其の陣營に在りましたが末頼もいし剛毅の氣象は焦宇の間に現はれて居ました。賀々丸(後の武朝)を輔けて今川軍の侵略を防いだのは菊池肥前守武安でありました。然し官軍の武光武政有繼いで歿した後の經營は

益々困難となり一方今川了俊の計略は着々と功を奏し來ました。

文中三年八月三日賀々丸は高良山を出で筑後川を渡り賊將山内及毛利元春の軍と福童原に會戦しましたが敵は了俊の來援によつて益勢を得十七日には官軍敗れて河南に退き、今川軍の集中と共に高良山の陣營の保ち難きを察し十月の初賀々丸武安以下二ヶ年の經營に亘る高良山の陣地を退し懷良親王良成親王を奉じて肥後に歸り隈府の本城に閉ち籠り外敵の警戒を嚴重に固めました。

水島の快戦

高良山が敵手に陥つて以來、筑後の官軍の諸城は相繼いで陥落しました。今川軍は進んで肥後に侵入し、其先鋒大友義匡、田原氏能等は、筑後谷川の本陣を發して肥後の界なる大水山關を越え、進んで玉名郡小島村に入り、文中三年十一月には同城を陥れ、十二月には目野に逼つて、千田、山本以下諸所の官軍を破りました。今川了俊は谷川の陣から書を阿蘇惟村に送つて其の出兵を促し、先づ仲秋、義範を進ませ、十五日、仲秋、義範は岩原の陣につき、こゝに先鋒の兵と相會して、遂にその冬を越しました。

其の翌天授元年三月、了俊は中國勢及び黒木邊の軍兵を率ゐて、谷川の陣を發し肥後に入つて山鹿に着きました。四月八日了俊は更に陣を日の岡に進め、後に賀々丸の軍と相對峙しました。兩軍陣を

構へて以來睥睨すると共に月餘に及びましたが、互に自重してなか／＼戦を交へない。

さて武光及武政を失つた後の菊池氏は、一時實に慘憺たる有様でありました。賀々丸未だ幼少で自ら判形を書くことさへも出来ぬけれども、武安以下の一族は、此の際必死の運動を興してせめて肥後一國の味方だけなりとも叛かしめぬやうにと努めました。賀々丸が阿蘇惟武に誓書を送つて援兵を請ふた文は、涙なくては讀まれぬ程で誠にその苦衷の程が察し得られます。

天授元年四月、了俊自ら日の岡に來ましたので、菊池の御在所ます／＼危くなりました。五月六日賀々丸は誓を惟武に遣はし、懇々諭して出兵を請うたのであります。其書には了俊の陣形整はない中に早くやつつきたい。我が父祖の代は無爲であつたのに我が世に及んでかく身の浮沈をも知り難い有様となつて遺憾である。殊に征西將軍宮は、たゞ我が菊池をのみ依頼せらるゝに「もしこのまゝにてらつきよ候はゞ、しやう／＼世々のむねんたるべく候。この御ををもやすめ申、又たうけのほんゐをもたつしたく候。しよせんひらにたのみ申候。御かうりよくにあづかり候はゞ、かしこまり入候。云々」僅に十四才の少年にして、斯る大責任を負ひ、一意皇家の爲に盡さんとする赤誠に感動せられざるものはあるまい。惟武が之を快諾した時の賀々丸の喜びは如何であつたらう。想ひ見るだに胸の躍る心地がします。

此の時に當り、菊池には懷良親王及び良成親王の兩征西將軍宮ましく／＼て、菊池氏の勢威も稍々揚

り、當年十四歳の賀々丸も又累代の家憲を嚴守して、一意君國の爲に盡さんとするの勇氣と決心とを有つてゐました。七月十二日、今川了俊は、遂に陣を菊池郡水島に進める事となりました。そも／＼この水島の臺地は、山鹿の東約二里、隈府の西一里の地點に在つて菊池本城の門戸に當り、東の追間川と北の木野川との間に挟まる高原地帯で、菊池にとつては最も重要な關門の地點であります。三日の卯刻には、賊將了俊は既にこゝに着して陣を取り、菊池と南肥後の官軍との連絡を絶ちて専ら菊池本城の攻撃準備に力を盡し、深堀、國分、安富、都甲等の諸將をして陣中を警固せしめました。了俊はこの戦ひを以て九州に於ける兩軍の勢力の分るゝ所と認めたとに違ひない。了俊は更に九州の三大勢力たる島津氏久、大友親世、少貳冬資に書を送つて、其の來援を求めました。氏久、親世はこれを諾して來陣しましたが、獨り少貳冬資が來會せぬので、了俊は氏久をしてこれを招かせましたので冬資は意を決して水島陣に來ましたが、八月二十六日、了俊は冬資を陣中に招いで歡待し、酒酣なる頃、山内某をして冬資を搏たせ、更に仲秋をして之を刺殺させました。氏久は了俊のこの不穩なる處置を怒り、決然として歸國しました。此の事は水島に於ける兩軍勝敗の分岐する最大原因で島津氏久去つて後の水島に於ける今川軍の陣形は勢不利に陥り、將士は離叛し、士氣沮喪したが、了俊はなほ木野城に對して三宇田に築き、豊後勢を入れ、水島の古城を修築して肥前勢を入れんことを謀り、また所々に城壘を設けて菊池の農作を荒し、秋の收穫を害せんとの窮策を講じました。

菊池賀々丸(武朝)は、了俊の兵の士氣沮喪せるに乗じ機逸すべからずと猛烈に攻撃したので、了俊は遂に支へ難く、九月八日の夜に至り水島の陣を撤し、毛利、伊東、安富等の兵を率ゐて退却し始めました。そして急激なる追撃に應戦しつゝ大水山關を出で、筑後の瀬高、蒲地、酒見を経て肥前に退き横太路、國府を過ぎ、十月遂に遠く肥前杵島郡塚崎まで退きました。かくて了俊が五ヶ年の苦心を重ねた戦鬪は徒勞に歸し、菊池氏再び其勢を得て親王の御勢力はまた筑後、肥前に伸ぶることが出来ました。

矢部御退隱

菊池御在城の懷良親王は征西將軍の職を良成親王にお譲りになりました。元來矢部の地は五條氏の所領で菊池とは間道から連絡し前には黒木氏が在り後には阿蘇氏が在つて官軍の爲には險要の溪谷であります。即五條頼元の子良遠は此の地に住して御退隱後の懷良親王を迎へ奉つたので之れ以後が征西將軍の官良成親王の御活動の時代となります。

因に懷良親王は弘和三年三月廿七日御齡五十六歳にて薨去遊ばしたのであります。

託磨原に於ける菊池軍の奮戦

天授元年懷良親王は、征西將軍の御職を良成親王にお譲りになつて、筑後の矢部にお移りになりましたので五條良遠は、矢部に於て御退隱後の親王を迎へ致す事となりました。此時今川了俊は、肥前にあつて再興の策を講じつゝありましたが、菊池氏も其の對應策として天授二年、賀々丸は良成親王を奉じて武國、武元及び葉室親善、善安等を率ゐて肥前國府に討つて出ました、了俊は壘を築いて、官軍の來襲に備へ、九月には今川仲秋が松浦黨を隨へて博多に來り、筑前を鎮定して豊肥の連絡を取らうとしました、そこで賀々丸は肥後守護代菊池武國を遣はして、大綱で仲秋の軍を大いに破つたので、仲秋は再び肥前に逃走しました。

二年の冬、大内儀弘、大友親世は、豊前、豊後の大軍を率ゐて、今川の軍に投じたので、了俊は大いに勢を得、良成親王も又種々の準備を整へられつゝ、兩軍こゝに越年し、天授三年正月十三日兩軍大いに千布、蟻打に戦ひました。是の日賀々丸は、武安と共に良成親王を奉じ、一族を率ゐて陣頭に出で、奮戦し之に當つて頗る激戦が行はれましたが、官軍は不幸にして大敗し、武光の弟なる武義入道自關及び武安、阿蘇大宮司惟武を始めとして、葉室善安以下多く戦死しましたので、菊池氏は僅に賀々丸が良成親王を奉じて戦死を免かれたのみでありました。

千布、蟻打の敗戦は、官軍にとつて多大の打撃となり、良成親王は、菊池賀々丸、葉室親善等に擁せられて再び肥後にお退きになりました。了俊及仲秋は之を逐うて遂に肥後に侵入し、山鹿志々木原に陣し、將に菊池城に逼らうとしましたが、官軍力戦して遂に之を退けました。

八日、了俊は、仲秋及び大内、田原、毛利、松浦等を率ゐて、肥、筑の境なる白間野、大水山關より白木原にかけて官軍と戦ひましたが、大内氏の軍が奮闘したので、官軍遂に敗れ、值田宮（良成親王に従ひ給ひし宮ならん）を始め、菊池氏の一族以下百餘人戦歿しました。

了俊は、大水山關以下の戦に捷を得ましたので、直に南下して合志郡板井原に出陣しました。此の時肥前から了俊に従ひ來た深浦、安浦等の外、新に安藝國から須藤景平、但馬經中の如き諸將も來て板井原の陣に加はりましたので、今川軍の勢は益々振ひました。一方、了俊は肥後の鎮定を仲秋、義範に委して博多に還りましたが、今川軍は菊池、合志を犯して、遂に隈本城を圍み、仲秋は其の主力を率ゐて、目野の陣中に天授四年を迎へました。

了俊は、菊池氏が白木原の戦以後大に衰微したのを機として、更に打撃を與へんと、九月博多を發して再び肥後の野に討ち出で、十八日には隈本の藤崎に陣し、大内義弘、盛見及び大友、去川、碓山新納等の來着をまつて數千騎の大勢となつたので、愈々進んで菊池城を收めようとなりました。武朝は之を聞いて直ちに良成親王を奉じ、一族及び葉室親善以下の兵を督して了俊の大軍を諂磨原に迎へ、

二十九日、遂に激戦が始りました。武朝は當時に十六歳の少年でありましたが而かも寡兵を以て中國九州の重なる諸大勢に抗して戦うので、唯天運に任せて奮闘し、必死の勇を振つて戦ひましたが衆寡敵せず、一族以下銳卒數十人遂に戦死し、武朝も傷を被ひり、官軍はまさに潰散せんとする危急に瀕したのであります。良成親王は未だ二十歳に満たせ給はざる血氣盛なる御齡でありましたが、この状態にいかでか躊躇し給はん。自ら陣頭に立つて兵を指揮し、雲霞の如き了俊の陣に向つて、突撃奮闘し給うたので、味方は爲に勢を恢復し、敵兵は敗れて退散する事となり、斯くて才幹非凡なる了俊も託摩原の戦に敗北し、已むなく筑後へ退却しました。思ふに菊池氏僅に十六歳の主將を以て探題了俊に對抗し、しかもよく數回にわたつてこの驍將を撃退し、彼をして後へに墜若たらしめたのは、偏に菊池氏の團結の鞏固にして、しかも一人の叛者も出さずにとゞ苦闘倒れて後已むの精神に充ち満ちてゐたのに外ならぬのであります。

菊池の落城

筑後にあつた今川了俊は再び軍容を整へ、九州、中國の兵を合せて肥後に侵入し、本軍は仲秋之を率ゐて、天授五年八月、伊倉、圓山等の官軍を攻撃し、十四日には千田原に至り、十六日には平尾城を攻めて之を陥れました。仲秋はまた別に橋公次等を遣して竹迫の官軍を攻め、十八日には坂井原に

着きました。坂井原は、隈府の西南一里餘の高原で、直下に菊池の平野を望み、遙に菊池の本城を展望するの要地であります。そもくこの頃は天險を有する自然の地域を利用して城と看なし、其の防禦地内に多くの小城寨を配置したもので、即ち菊池氏も菊池川の流域たる菊池郡全体を天然の城となし、中央に本城を置き、城内各地に十八の外城を配置し、其の外城には一族を分據させて置いたのであります。されば今川仲秋が菊池の本城を攻撃するのは容易の業ではなかつたので、仲秋は根拠を坂井原に据ゑ徐々に攻撃して漸次其の本城を陥れやうと九月十九日から攻撃を始め、二十七日には赤星城、九月五日には木野城を攻めました。が陥れることが出来ず、菊池軍もまた最後の地として最も頑強に抵抗し、容易に城を棄てない。殊に同地は菊池氏が多年の勢力を扶殖せる所で、決して容易に陥るべきものではない。爲に仲秋は坂井原に陣したまふ、天授五年を送りて六年を迎へ、了俊もまた坂井原の陣に来て、菊池諸城の通路を塞ぎ、糧道を絶ちて、遠くから次第に包圍する方略を取りました。そして四隣の形勢を熟察しつゝ慎重の態度を以て、輕々しく兵を動かさず、天授六年も又暮れて弘和元年、今川氏は益々兵を集め菊池郡を包圍して四月二十二日には仲秋は木野城に對壘を構へ、頻に同城を攻撃しました。菊池氏は防戦大に努めました。が、遂に抗し得ず、二十六日には城は陥り吾平、河内また相前後して敵に犯されることゝなりました。仲秋は菊池の本據に侵入して菊池勢の防禦を破り五月十二日には本城に逼つて攻撃益々急となり、今や菊池氏の城壘は僅に武朝の據れる隈府本城と、

良成親王の御在所である染土の二城となりました。仲秋は一たび坂井原の陣に還つて更に戦備を整へ深堀、橋、安富等肥前勢の優秀なる者を選び、之を率ゐて六月十八日坂井原を發し、先づ武朝の隈府城を攻撃すべく松尾に陣し、二十三日丑刻夜未だ明けず、一痕下弦の月天空にかゝり、曉露菊池の平野を潤すの頃、吶喊して急に攻めかゝつたので、武朝支へ難く城は遂に陥つて了ひました。仲秋は直ちに今川五郎に良成親王の染土城を攻撃せしめましたが、時恰も天雨を降し風さへ加はつたので、親王は此の機に城を棄てゝお遁れになりました。かくて天險を占めた菊池の諸城も天下の大勢には抗し難く、遂に敵手に落るに至つたのは是非もない、しかし斯る場合に於ても終始一貫して難局に當り、宗族一門一人叛者を出さなかつたのは、蓋し菊池氏の最も誇とする所でありませう。

武朝の卒去

菊池肥後守武朝は南北合一後も足利氏の威勢に屈せず依然として九州に雄視して居ましたが、應永十四年病に罹り三月十八日四十五歳を一期として卒去されました。法號を神徳院殿玄微常期大居士と申します。

武朝の長子兼朝は弘和三年に生れ没後父の菊池家第十八代を襲封し從四位の下肥後守に叙せられました。

兼朝の墓所は岡田の正善寺境内に在ります。

一九 持 朝

永享三年菊池兼朝は守護職を退き長子持朝が之を繼いで從四位の下肥後の守に任ぜられました。永享十一年冬十一月少貳教頼は兵を擧げて叛しましたので持朝は城、赤星、隈部、原、木野、白石、八代等の一族郎黨を率ゐて筑前に進出し大内氏と連絡を取つて教頼を生松原に撃破し凱歌を揚げて菊池に歸りましたが、文安三年七月二十八日遂に卒去しました、時に年三十八歳で今片角の菊榮山善光寺に葬つてあります。

二〇 爲 邦

持朝の長子爲邦は永享二年に生れ幼名を犬丸と申して居ります、文安三年父の卒去によつて家を繼ぎ從四位の下に叙せられ隈府に居城しました、康正元年一揆起つて隈府城を圍み爲邦防いで危の時島津勝久の來援により、僅に降落を免れました事が菊池傳説に見えて居ります。

菊池氏の對外運動

康正元年爲邦の弟爲房は使を朝鮮に遣はし、翌二年爲邦も貿易を營み翌三年には八代の名和教信も貿易船を送り應仁元年にも菊池一族高瀬武教及び大橋政重も使を遣はしましたことが彼の國の海東諸國記に見えて居ります。斯の如く菊池氏は懸軍の折にも常に對外運動を怠らなかつたのであります。

玉祥寺と碧巖寺

爲邦は幼少の頃寰中和尙の教音を受け後惠風に學び儒と禪とに通悟して居ました、享徳年間隈府に江月山玉祥寺を建て入吉永國寺實庭和尙の高弟竹庵仲少和尙を開山としました。文正元年卅七歳で肥後の守護職を嫡子重朝に譲り隈府城を退きて合志郡板井村龜尾の城麓水明の地を卜して日夜碧巖集を講究し後居館を寺となして神龍山碧巖寺と稱し如拙伯巧和尙を迎へて開山としました。

二一 重 朝

菊池文學の由來

一、二十一代重朝公は肥後に身を起し十七歳で父の讓を受けました。生來勤王の志厚く王事に力むる

と共に大に文學を奨励し孔子廟を隈府に建て、所謂菊池文學の基を開かれたのであります。當時は天下亂麻の如く文學は地を掃はんとする時に際し私に隈部忠直と計り桂菴和當を招し以て菊池の里に燎たる光を放たてめたのであります。

桂菴は應仁元年明に留學し七年の後文明五年歸國し重朝に召されて正觀寺に住はれました。同寺は興國五年元恢和尚の開山であります。武光公に召されてから元恢を添ふて京洛より來る者が多く殊に桂菴の文明年間には忠直を始め阿蘇の白石兵部、源基盛、僧月舟、玄叢雪溪等幾多の秀才輩出して儒學の黄金時代を作られたのであります。そして室町時代には九州文化の中心をなし、徳川時代には人材輩出して漢學界に貢献し維新の大業完成に際して薩長土肥の四藩が常に先驅となつて活躍されたのも大に故ある事と思はれます。尙南北朝以後にも菊池氏が獨り正忠を以て一貫し順逆の大義を誤らなかつたのも此文化の影頃偉大なりと云はねはなりません。

二、澁江家の興學

又澁江家に代々碩學輩出して菊池文化の發達を助成したのも世人のよく知るところであります。澁江紫陽氏は幼少の時より好學の志厚く水足博泉、加々見鶴灘等に師事して遂に古學派を興されたもので當時武藝が盛んで文學は地を掃つて男子で書を持つ者は世人に笑はれた程で紫陽氏は家居し日暮をまつて山鹿郡分田村加々見氏の門に往復し五里の返道を通學して刻苦助勵遂に藩侯の教導師

を命ぜられることになりました。晩年家塾を起し塾生三百にも達した程で後には藩廳の嘉賞にあづかり士班にまで列することが出来ました。

尙菊池正觀公(武光)墓所の荒廢を歎き隈府町の宗傳次氏と計つて神道碑を建てられし事など幾多の御功績を後世に残されました。

澁江家の養子松石氏も百家の學に涉り禮法を修め國學を嗜み和歌を學ばれましたが、最も地理に精通し菊池風土記、肥後郷名考等を著しました。門下には、龍淵、玄肅、伯順等幾多の秀才を出し肥後藩よりは櫻花章の羽織を賞せられ尙幕府の大學頭林家よりも敬意を表せられた程で其の菊池文學の興隆に對する御功績も又偉大なものがありました。

一一一 能 運(武運)

島 原 落

重朝の卒去前菊池家では嫡子宮菊丸(武運)の配として相良長毎の嫡女を迎へんとし契約をすませましたが後婚儀を見合するに及んで相良家では菊池家の破約を口實として八代の豊福城に楯籠りました。武運は肥後勢豊後の援軍を以て豊福に進入し日夜襲撃戰の結果相良方は多數の死者を出して敗軍

となり爲續の逃れし八代をも陥落して了ひました。

此時宇土爲光叛を圖りひそかに菊池の姦臣と共に文龜元年五月十三日武運が玉名の巡視中の留守に乘じて短兵急に隈府本城を陥れました。武運は直に肥筑の兵を従へて隈府に迫り王祥寺原に陣し翌二十日未明より猛烈な戦闘を開始しましたが、菊池武運方では柱石とも云ふべき重安以下千田、黒木、溝口等の勇將を始めとし數百の猛卒を失ひましたので、武運は身を以て玉名に走り舟に乗じて島原に渡り有馬家に依ることゝなりました。

文龜三年九月菊池家の老臣重峯及隈部運治等義兵を擧げて之を回復しましたが、其後能運は高瀬の戦闘に重傷を蒙り隈府に起臥して病勢がよくないので重安の長子政朝（後政隆）に譲り永正元年二月十五日二十五才を一期として卒去されました。

米良の奥地へ

菊池武運が島原に落行く時嫡子重爲は一家臣に寄託せられて密に日向の米良山中に落ちのびました後長じて米良石見の守重次と名乗りました。そして實弟重治を養子とし其子重種は實弟重治を養子とし其子重鑑は弟重良を養子とし其子重隆は子重直に重直は又弟秀精に譲りました。其の子孫が則重、則信、則元、則純、則敦、則順、榮叔、忠、武臣を経て現男爵（菊池武夫）家となつて居るのであります。

ます。

一二三 政 隆

能運卒去に際して肥後の守護職を政隆に譲るべく遺命しました、これは嫡子重爲が未だ幼少であるばかりでなく、米良の山中にあつて到底襲職の出来ないためと一は能運が政朝の祖父以來の經緯と歴史的餘哀が含まれて居たからであります。

そこで政朝は父重安の戦死以來其後を繼いで居ましたが、直に叔父重信の子重基に譲り、永正元年三月本家を相續して菊池第二十三代の太守となり年僅かに十四歳で肥後の守に任ぜられました。そして名を政隆と改めました。

阿 蘇 の 嵐

人生の危険は山にしもあらず水にしも非ず只人情反覆の間にあるのであります。能運の卒去後政隆の幼主なのを機とし阿蘇氏の菊池乗取に關する暗中飛躍は愈露骨となつて來ました。

菊池家の元老重臣は阿蘇家の巧妙なる外交手段に籠絡せられ當主政隆に將帥の略なしと云つて遂に之を廢し阿蘇惟長を菊池に迎ふことに議決したのであります。然し政隆は能運の遺言によつて相續

したもので又僅十五歳の若君に將帥の略なしとの断定は君意を無視するものであり實に言語同斷と云はぬばなりません、然かも惟長は菊池重朝と戦ひ之を屈辱せしめた阿蘇惟乗の子ではないか、時勢の推移とは云へ實に淺猿しき極みであります。

菊池、阿蘇兩家の交渉は纏りました、氣概ある武士は頻に反對しましたが一夏の將に倒れんとするよく一木の支へ得るところに非ず、永正二年十二月三日菊池家の重臣八十四名は最後の連判狀を阿蘇家に送り當主政隆を追ひ惟長を迎へた惟長は菊池に來り肥後の守となり菊池武經と改稱しました。怖ぞや一陣の阿蘇威……名花將に散る……

久米原の戦

憐むべきは十五歳の政隆であります、菊池を追はれて暗雲に迷ふ孤雁の如く悄々として八代に赴き復仇を計りました。月日は流れて矢の如く永正六年となり八月玉名の櫻馬場に大友軍と戦つて捕へられ矢部に護送せられました。

永正六年八月十六日の月夜政隆主従匹馬肅々と合志軍田島と久米の莊との間道を護送される時舊臣玉屋三郎貞親手兵二百を以て突如切込んで政隆を奪還して久米の安國寺に陣營を張りました。急報限府に傳るや武經五百騎を以て久米原に着陣し、八月十七日己刻(午前十時)より猛烈な戦闘が開始せ

られましたが寡寡敵せず政隆は殘兵を集めて遂に安國に入り割腹し家臣も同じく此の薄命の君主に殉じたのであります。

二四 武 包

傳統二十四代

永正二年十二月菊池家を横領した武經は性驕暴で一藩に嫌忌され政隆を殺した後は暴惡淫行甚だしく近臣の諫言をきかず逸樂を恣にしたので菊池の老臣は素より國中悉く憤慨されるに至つたので永正八年武經も自ら危険を感じて遂に隈府を夜逃げし阿蘇の古巢へ舞ひ戸りました。

そこで菊池の老臣隈部親氏及長野武貞等相議して託磨武安の子武包を迎へて菊池の嗣君と仰ぎました。武包は幼名を宮松丸と云ひ隈府の城本に來て二十四代菊池氏系統最後の統領となりました。

此頃大友氏は菊池家の不振に乗じて之を乗取らんと企て菊池家の老臣と策して之を追ひ、自ら隈府城に打入つて肥後の守護と稱し名を菊池義宗と改めました、隈府を退いた武包は舊臣を糾合して玉名の筒嶽に楯籠りましたが阿蘇大友の連合軍に破れて島原へ逃れ天文元年二月十三日遂に果無き卒去を遂げられたのであります。

思へば延久二年初代則隆が肥後に入國して菊池氏を稱へてより武包の卒去に至る實に四百六十三年是に菊池氏血統の守護は滅亡して霜に傲つた菊も凋んだのであります。

世人の多くは大友家より乗込める義武や宇土家よりの爲光或は阿蘇家より乗込める武經等を菊池氏の守護として加ふれ共著者は之等を代敷より省き純菊池氏の系統二十四代を以て限定せり。

終始一貫の純忠

天授六年六月廿三日染土の城は敵手に移り、良成親王は武朝を隨へて「たけ」の山中へ隠れになりましたが、間もなく川尻、宇土兩氏の援助によつて宇土にお移りになりました。然し當時八代の名和氏や球磨の相良氏は、菊池氏の勢力の失つたのに乘じて、將軍宮を擁して事を起さうとし、朋黨を結びて武朝の排斥を謀りました、そして筑後の懷良親王及び吉野の後龜山天皇に讒訴しましたので、吉野の方でも勅使を遣はして尋問せしめました。そこで元中元年七月、武朝は長文の申狀を認めて、赤心を吐露し以て吉野の朝廷に具申しました。

今川貞臣(義範)は、肥後にあつて、事ら攻略經營に力め、次第に官軍の諸城を陥れて、元中七年には河尻、宇土の兩城をも陥れましたので、良成親王は菊池武朝を率ゐて八代にお退きになりました。八代には、官軍名和顯興があるので、親王は之にお頼りになりましたが、元中八年、今川の軍八代の

諸城を陥れたので、親王は己むなく八代の奥(高田御所ならん)にお避けになりました。武朝は菊池に歸りましたが、やがて親王は八代を遁れ出で、筑後矢部に遷り、五條頼治にお頼りになりました。武朝は、矢部の宮方と連絡をとつて、頻りに再興の策を講ぜられました。中央に於ては、元中九年、後龜山天皇が京都に還幸して、神器を後小松天皇にお傳へになりましたので、南北兩朝は茲に合一して應永元年、今川了俊は幕府の命によつて京都に召還され、新探題澁川滿頼が、應永三年博多に着きました。應永四年九月、武朝兵を擧げ、大内義弘の弟滿弘及び盛見と豊筑の間に戦つて、滿弘を八田に殺し、武朝は肥後に歸つて高瀬城に據りましたが、大友親世、澁川滿頼に攻められて、筑後に走りしました。九年、赤星氏又肥前に攻め入つて滿頼を破り、十年、武朝亦滿頼と千栗に戦ひ、太に新探題を惱しましたが、應永四年三月十八日、武朝は四十餘歳を一期として卒去しました。武朝は吉野朝衰運の時世に生れ、僅に十數歳の弱冠を以て、強敵今川了俊に對抗し、寂阿以來の家名を維持し後征西將軍ノ宮を奉じて忠節を盡し、苦戰奮闘、克く名聲を擧げ、倒れて後己むの誠を盡された其の功績は誠に偉大と云はねばなりません。明治四十四年、從三位を追贈せられました。

武朝卒して子兼朝後を繼ぎ、持朝、爲邦と傳へました、爲邦の子重朝は、大友氏を攻めたことがあります。其の子能運の時に、菊池氏の勢力衰へ、政隆、武包を経て、義武に至つて滅亡しました。

一、菊池神社記

別格官幣社菊池神社

一、社格

明治三年四月鎮座
明治六年五月郷社ニ列格
明治八年七月縣社ニ昇格
明治十一年一月別格官幣社ニ列セラル

二、祭神

贈從一位 菊池武時卿
贈從三位 菊池武重卿
贈從三位 菊池武光卿
配祀
贈從五位下 菊池武士朝臣
贈從三位 菊池武安卿

三、祭日

大祭 例祭 五月五日
新年祭 二月十七日
新嘗祭 十一月二十三日
中祭 歲旦祭(一月一日) 元始祭(一月三日)
紀元節祭(二月十一日) 天長節祭(四月廿九日)
秋祭(由緒祭)(十月五日)
小祭 月次祭(每月五日) 櫻祭(四月上旬)

贈從三位 菊池武政卿 贈從三位 菊池武吉卿
同 菊池武房卿 贈正四位 菊池重朝卿
贈從四位 宇都宮刑部丞 贈從五位 菊池武朝卿
贈從五位 菊池武敏卿
赤星有隆 菊池賴隆 菊池降舜 菊池武義 菊池武明 赤星武貫
葉室高善 葉室善安 加屋兵武大輔 參見岡三河守 莊美作守 國分二郎
下田帶刀 松田某 岩野某 鹿子木某

武時卿正辰祭(五月四日) 武士朝臣正辰祭(五月十七日)
 鎮座祭(五月十七日) 武政卿正辰祭(八月十二日)
 武重卿正辰祭(九月廿二日) 武光大神正辰祭(十二月廿日)
 除夜祭(十二月卅一日)

菊池神社の創立の事

菊池神社創立は明治二年より起工し同三年春落成す。右創設に係る職工人名左之通

- 1 社床地均しは本郡各村人民を以てす
- 2 石垣並に土臺石の据付は觸頭西迫間富田喜右衛門水次村中津徳平にして成功せしむ
- 3 杣方の觸頭は藤田村岩木左衛門
- 4 地搗の音頭取觸頭野間口村川越源左衛門
- 5 木材は官林よりす

大工之部

- 6 棟梁 國主細川氏の抱御大工水足元吉。觸頭西迫間村澁江二七
- 7 神殿建築同赤星村 菊本仁右衛門 副觸頭 隈府町松原伍作 觸頭 西寺村生田作平

全 本分村徳永甚三郎

8 拜殿建築 副觸頭 隈府町出良葉作 全 西寺村生田伊太郎

9 神殿定役師 隈府町市原半三郎

本工事擔任者

10 御郡代中路新左衛門

河原 手永御惣庄屋 近藤平四郎

深川 手永御惣庄屋 服部典助

主任指揮

河原手永會所詰根小頭 富田敬之

深川手永會所詰根小頭 加藤寛六

主任指揮者は材木其他の諸式運搬諸手傳等右兩手永各村人民をして使役せしむ

11 本社第一鳥居之上松木植付寄附者

右 家老 溝口耕雲氏
 左 家老 平野九郎右衛門氏

12 櫻五百本 明治三年庚午三月寄附下河原村

今村七端

13 テンボガ梨一本 明治二十五年壬辰三月寄附

赤星儀平

祭神及累代の御墳墓

- 一 武時卿 福岡縣早良郡原村大字七隈（福岡市ヨリ二里）
- 二 武重卿 菊池郡隈府町大字隈府字亘（東福寺東約五町）
- 三 武光卿 菊池郡隈府町大字隈府字正觀寺（正觀寺境内）
- 四 武政卿 右同所
- 五 武士朝臣 葦北郡二見村正福寺境内
- 六 武朝卿 雪野ノ神徳寺境内？ 武敏卿武房卿（未詳）
- 七 重朝朝臣 菊池郡隈府町大字隈府玉祥寺境内
- 九 則隆朝臣 菊池村大字深川菊の池畔
- 一〇 經隆朝臣 花房村大字出田若宮靈社
- 一一 兼朝朝臣 岩村岡田正善寺境内
- 一二 持朝朝臣 隈府町片角光善寺境内
- 一三 爲邦朝臣 隈府町玉祥寺境内

- 一四 重朝朝臣 隈府町玉祥寺境内
- 一五 能運朝臣 隈府町新觀寺境内
- 一六 政隆朝臣 泗水村久米安國寺境内

菊池氏の同姓異氏（一族）

五百年に亘る菊池氏の當主は二十四代であります但其の兄弟は六十餘人もあり其の人々の子孫は數十家に分れて全國各所に散らばつて居ります。これらは菊池氏其儘を稱する者もあり又異氏を稱するものもあつて

- | | | | | | | | | | | |
|----|-----|----|----|----|----|-----|----|----|----|----|
| 西郷 | 小島 | 山鹿 | 兵藤 | 合志 | 迫間 | 天草 | 藤田 | 託磨 | 長坂 | 出田 |
| 村田 | 井芹 | 莊 | 立田 | 佐野 | 東 | 赤星 | 永野 | 砥川 | 八代 | 黒木 |
| 片角 | 江良 | 伊倉 | 九條 | 林原 | 蛇塚 | 方保田 | 平山 | 小野 | 加惠 | 城 |
| 本郷 | 中山 | 若宮 | 須屋 | 堀川 | 甲斐 | 長瀬 | 島崎 | 重富 | 木野 | 豊田 |
| 高瀬 | 深川 | 西 | 千田 | 新宮 | 宇土 | 米良 | 小名 | 中武 | 田爪 | 濱沙 |
| 小河 | 肥木田 | 山崎 | 大坪 | 高倉 | 武田 | 村井 | 廣瀬 | 紀伊 | 高橋 | 永里 |
| 岡本 | 石坂 | 福本 | 原 | 小山 | 益城 | 小野崎 | 肥後 | 林 | 菱沼 | 栖本 |

志岐 俣江 兼松 大木 菊池

等八拾餘家をも数えられる、尙一族郎黨の氏名を記したものは嘉吉三年正月持朝の侍付一百十六人、文明十三年八月連歌會の一百人、永正二年十二月連判帳の八十四人等が残つて居ります。

三、菊池の史跡

官軍墓

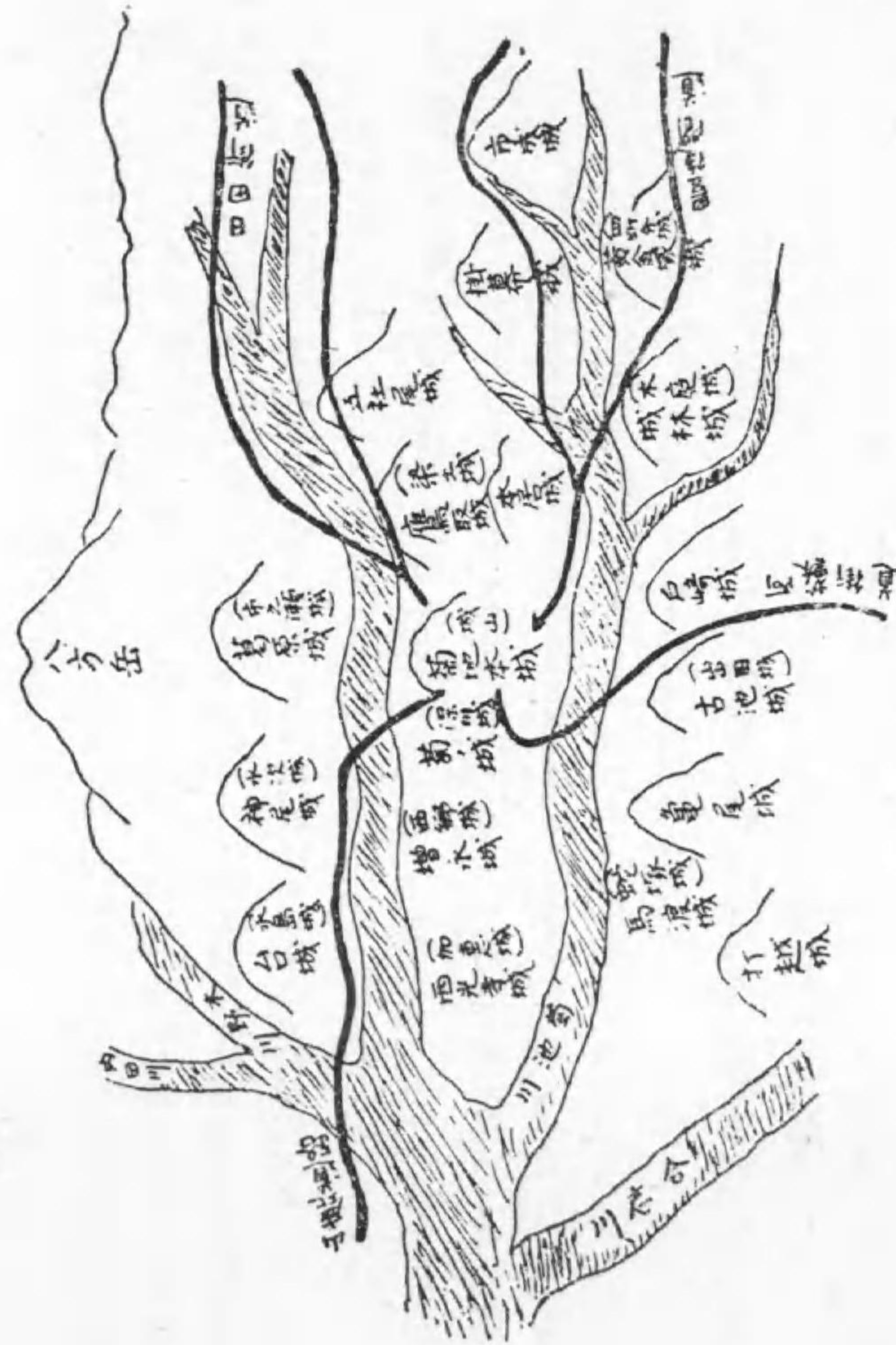
菊池神社の東南月見御殿に續く連丘上、櫻萩叢生の中に在ります。こゝは明治十年の役に際し向坂鳥巢方面の官軍は味方を顧る暇なく死傷算をなして敗退しましたが、戦後數旬たつてから陸軍中将横山友實以下百名の屍を収めて葬つたところでありませう。

毎年四月四日櫻花爛熳の候招魂祭を行つて其の英靈を祭つて居ります。

内裏尾 (懷良親王宮跡)

菊池神社の後方谷を一つ隔てた小丘上(茶臼山)にあります。藎々たる繁みの中に削平した一小區こゝが吉野朝時代征西將軍懷良親王及良成親王の御當留の跡である「征西將軍の宮跡」と刻した碑は文政八年五月十五日に建てたもので菊池の儒者葉室黃華の筆と申して居ります。因にいふ懷良親王の征西將軍に任せられ給ふたのは延元元年九月まだ武重公が叡山の行在所に在つた頃で隈府へ御入城遊

城外八十四池菊



ばしたのは正平三年正月で武光公の時であります。

月見殿跡

隈府城の一角(二の丸)熊耳山の丘上にありまして前面には菊池平野遠く連り東方に鞍岳西方は有明海を隔て、遠く雲仙の勝景を一瞬に集むる眺望の地で懷良親王御在城の頃御殿を茲に設け屢々月見の宴を催して御旅情を慰め奉つたところであります、當時は十尋圍の大裏杉二本ありましたが一本は枯れ一本は寶曆年間火事にかゝつて失せましたので後澁江松石及正觀寺和尚等が五本を植えつぎましたが今は僅に一本だけが残つて居ります。

先年熊本縣下に於て行はれたる陸軍特別大演習に際し畏くも大元帥陛下におかせられては十一月十二日親しく此地に於て御統監を召させ給ひました。地方民は此榮譽を記念するの意味に於て大元帥陛下駐蹕之處と題する記念碑が設けられました。

孔子堂の址

隈府町字高の瀬の田浦の中にあります。こゝは二十一代菊池重朝公が父爲邦と計り文明九年二月聖堂を建て、孔子の像及十哲像を祭つたところで實に菊池文教の淵源地になつて居ります。

其當時は天下亂麻の如く亂れて文教地を拂ふの時でありましたが菊池氏が獨り此の里に學問を起して西海文教の府となされたのは實に千古の美事と云はねばなりません。世の諸豪が往々にして本末を

誤るの時菊池氏が獨り大義を明にし終始一貫忠勤を勵まれたのは故有ることと思はれます、惜いかな寛文二年菊池氏没落後遂に破壊されました。俗間には孔子堂と呼んで居ますが現在の碑は文政八年に建てたもので、中島氏の建てられたものと並立させてあります。

神軍木、松囃子

玉垣の中にある神木は征西將軍の宮の御手植の神木で圍九〇九纏に達し、もう既に五〇〇年を経ても木精尙衰へず益々神靈を發揮して居ります。樹下には祭壇があります。

正面の能場は毎年(十月十五日)菊池神社大祭の日神輿を安じて菊池氏傳來の松囃猿樂を催します、松囃は天下太平安全の祈禱祭で菊池氏が毎年正月城内で行つて居たものでありますが後出陣に際し興行を怠り凱旋の後七月十五日に行ひ現在は九月十五日に行ふやうになつたのであります、現今の舞台は寛政八年に建設したもので此神事を怠る時は火難が多いと云ふので菊池氏没落後も今尙残つて居ります。

隈部忠直の墓

孔子堂跡から迫川の對岸に杉掠樟の小森の下にありますこゝは上總介忠直の墓所で里俗に誤つてタダノブと呼んで居ります。

忠直公は應永三十三年五月三日の午の年午の日午の刻に生れたかたで母は菊池氏の女で十七歳の時

結婚し忠直を産んで翌年正月二日に十八歳で去りました。忠直は至孝至誠、文武兼備の名將で重朝公以下氏の三代に忠勤を盡して所謂菊池文學の黄金時代を作られた人であります。生來孝心原く殊に午の刻に生れたのに因んで自ら馬頭觀音を刻み、光九寺を建て、迫村に祭り長録三年母の三十三年忌に際しては法華經六萬字を一字一石に手寫してこれを埋葬したと傳へられて居ります。

菊の池

菊池村字深川にありまして道をへだて、則隆公の墓に對して居ります。古の穴池で其の形は菊花の如く圓く池邊一帶には紅白爛漫とし菊花亂れ咲きしに因んで則隆公菊の池と命名されました。古は水漫々として如何なる旱魃の時にも涸れることなく卻中を灌漑して居りました。現在菊之池の三字を刻した石碑があります。池周には雜草竹林繁茂するも決して竹根侵入することなく又池中に蛙の聲を聞くことがないと云はれて居ります。

駄護地藏

菊池村深川にありまして淨土宗に屬し本尊は地藏菩薩で牛馬の守護神として遠近よりの參詣者が多くあります。殊に一月四日は郡内各地より牛馬を引いて參詣します。

里俗の説にこゝは元菊池氏の馬屋別當某の墓所で其の上に堂を建て、地藏を祝つたものでありまし

て堂前には今尙馬の船と云ひ傳へて長六尺巾三尺程の石鉢が残つて居ります。

堂山金比羅神社

金比羅神社は輪足山の山腹に在ります。其の昔は松樹の中に御神体を安置してありましたが或年香火の燃えうつるところとなつて遂に枯死して了りました。後明治十二年社殿を建築して十三年四月立山耕雲氏の發起によつて遷宮式を行ひました。現今も四月十日の例祭には櫻の頃とて一入賑ひます。

北宮神社

菊池川の清き流の邊り老樟の茂みの間に鎮座在す北宮神社は後龜山天皇の天授四年八月十七代菊池武朝公が阿蘇の北の宮を勸請されたものであります。本社は郷社ではありますが古來本郡の鎮護の神として遠近の崇敬厚く毎年九月九日の大祭には數千の參詣者があります。

元々本社には數多の寶物がありました。天正七年三月薩州軍侵入の時社殿は燒失され錦旗以下寶物も多く掠奪されて了りました。現在残つて居るものは征西將軍の宮御寄進の軍配團扇のみで此の軍配は横六寸八分、縦六寸二分、地は革で、柄は竹を藤で巻き、表は金に朱の日の丸、裏は革地に金の日の丸で、先年大演習の際長くも聖上陛下の臺覽を賜はられた本社唯一の寶物であります。

尙正面にある樓門は縦一丈九尺三寸、横五尺八寸、赤塗丸葺の古築で五百年前の物、傳へられて居ります。

熊耳山正觀寺

七六

正觀寺は菊池氏の氏寺で興國五年菊池武光公の建立に成り當時は寺領六十六町歩を有する巨利で五山の上に置かれてありました。當寺の開山は京都建仁寺の榮西千光國師の法孫、元恢和尚であります。元快は武時公が戦死するや其子武光を聖福寺に忍ばせ後日之を菊池に護送せる傑僧で武光公にとつては實に命の恩人であります。仍て襲封の後本寺を建て之を招きました。此寺は菊池家の全盛時代最繁昌せる巨利で碩擧高僧多く輩出して菊池文化に貢献せること偉大で名畫古文昔も今尙存在して居ります。後菊池家衰退して大友家支配の時寺領を没收され、天正十五年佐々成政攻落によつて僧徒は散逸しました。加藤氏領するに及んで寺領高十二石五斗を給せられました。

江月山玉祥寺

玉祥寺は隈府町大字玉祥寺に在る曹洞宗の禪寺であります。此の寺は球磨郡永圓寺の末寺で菊池爲邦の建立に成り正觀寺と共に菊池氏の菩提寺であります。本尊は安阿彌の作になる勢至菩薩を安置してあります。但其後失火の爲め焼失して了ひました。現在四百七十年を経過して居ります。院内には菊池爲邦同重朝の墓があります。

菊池五山

菊池五山は西征將軍懷良親王の命により十五代菊池武光公が定められたのであります。

一 輪足山東福寺

東福寺は亘の山腹眺望の地に在つて天台宗に屬して居ります。此寺は澄慶法師の開基に成り叡山の末寺とも云ふ可きもので行基菩薩の作と傳へられて居る千手觀音を本尊として居ります。寶物は來潮の作なる懷良親王の御尙像があります。毎年八月一日が千燈籠と云つて遠近參詣者で賑ひます。

二 無量山西福寺

西福寺は菊池村字西寺に在りまして本尊は阿彌陀如來で和銅二年の開基と傳へられて居ります。其背後には赤星有隆城武岑の墳墓があります。

三 手水山南福寺

南福寺は花房村大字出田に在ります。此寺は元々天台宗でありましたが廢寺の後武光公が再興して五山の一に加へられました。本尊は藥師如來で其後荒廢し今は僅に草堂のみが残つて居ります。

四 袈裟尾山北福寺

隈府町大字袈裟尾にあつて初めは永福寺と云つて居りまして此寺は天臺宗の巨利で弘仁年中に傳教大師の開基と傳へられて居ります。

上宮には同大師の作に成る大同如來を本尊とし鎮守は山王七社を勸請し中堂には一刀三体の藥師

七七

並に十二神を調刻し山下に十二坊を建て、ありました、そして祈禱料千貫寺領千石を賜つた此の巨利も一時廢蹟し後菊池武光公によつて北福時と改稱されたのであります晨昏梵鐘耳に満ちて無明の暗を覺し、眞如の月朗にして座禪の狀を昭せしも世換り星遷り殆廢頽して僅に小庵を残し往昔の殘燈を点するのみであります

五 九儀山大琳寺

菊池村大字大琳寺に在りまして本尊は六臂の觀世音を安置してあります本寺も後世幾度かの改修を経て現今の瓦葺堂は明治三十四年改築されたものであります。

尙其他に上町の廣現寺、立町の妙蓮寺及び檀林寺井手端の西照寺、立石の要覺寺及安樂庵、亘の光満寺等由緒深き幾多の古刹があります。

菊池の傳説

米原長者

隈府町より松山原の古戰場を過ぎて約一里、其處には平和に日々を送つてゐる小さな農村があります。此の邑を城北村米原と云ひます。淳朴な村の祖父さん祖母さんは可愛い孫の夜の慰みによく「米

原長者」の話をしては楽しい幸福な一時を過すのであります。物語、それは斯うであります。

×

×

昔京都の或る公卿さんに一人の娘がありました。此の娘さんは大變美しく、其上至つて氣立も優しく小さい時から非常な信心家で常に清水寺の觀音様にお詣りして居りました。「鬼も十八蛇も二十」とか申しますがわけて生れつき器量のよい娘さん、年頃になつては一層其の美をまして來ました。それと共に各方面よりは降るやうに、縁談が申し込まれました。父母達は良縁を撰んでいろ／＼とすゝめませんが、どうしても此の娘さんは頭を縦には振りませんでした。或日兩親は心配の餘りに其のわけを尋ねますと其の娘さんは、さも恥しさうに答へて申しますに

「私は親さまの御承知の通り常に清水寺の觀音様を信じて居ます。私の身の上につきましては觀音様にお伺ひ致しますれば必ずお教示がございませう。折角のお心盡を無にするわけでは御座いますが觀音様の御教に従ひ度う御座いますから今暫くお暇を下さいますやう」

と云つて父母に願つて一週間のお暇を貰ひ清水の觀音様にお籠りして一心に佛意を乞ふのでした。それから丁度満願の夜でした。觀音様は娘の夢に現はれまして

「善哉／＼我は清水の觀音なり汝日頃の信念に免じて汝の夫を授く汝の一生を托する夫は都にはなし白縫（不知火）なる九州肥後の國菊池郡四丁分の賤の夫小三郎と申すものなり之に嫁せば幸福意に委

すべし行いて偕老同穴の契を結ぶべし、ゆめゆめ疑ふこと勿れ」

と告げて雲の如く消え失せました。娘は夢より覺めて嬉しい中にも遠く父母の許を離れねばならぬことを悲しみながら家に歸りて此の事を父母に告げました。父母は大いに驚き一度は失望も致しましたが佛意に出づる娘の願ひもだし難く遂にこれを許しました。娘は父母に別れを告げて住み馴れし都を後に海山越えて幾百里幾十日の憂き旅を續けて西の果て九州肥後の國菊池の里に辿りつきました。そしてやうやくのことに四丁分を尋ねて小三郎の家を訪れました。

小三郎は親兄弟もなく本當に一人者で家は小さな堀立小屋に壁は藎を引き廻し屋根は附近の菅を集めてふき僅かに雨露をしのぐにも足らぬ程で毎日蓆をあんのでその日の暮を立てゝ居るのでした。

娘はこの有様を見て一は驚き一は失望しました。然し折角四丁分(今の水源村)まで尋ねては來たものゝ今更引返す事も出來ず、兎に角家に這入つて小三郎に會ひて一部始終を話しました。これを聞いた小三郎の驚きは一通りではありませんでした。そして云ふには自分は御覽の通りの貧乏者。毎日こんなにして蓆を總んでは町(阿府町)に賣りに出で、米と代えてやつと其の日の暮を立てゝゐる者であります。今こゝに編んでゐるのも明日の米と代えるもので一人の口さえやつと養つてゐる有様です未だ妻をめとる等思ひもよらぬ事それこそ妻等を迎へた時には二人共餓死するより外はありません。殊に貴女のやうな高貴な方を妻にするやうな身分ではありません。どうぞ御歸り下さい」と斷る

のでした。

娘は尙ほもはる／＼此處まで尋ねて來たわけをくり返して無理にも家にとゞめて貰ひ懐中より金子二兩を出してこれを今日の米代にと小三郎に渡しました。彼は今まで一度も使つた事の無い此金子をさも不思議さうに受取つて米屋へと立ち出でました。ヤ、暫くあつて小三郎は歸つて來ました。見れば米は買はずに袋は肩にかけたまゝではありませんか。娘は何か忘れものでもしたのかと其の様子を見守つてゐましたがさうでもないらしいので不審に思ひ其のわけを尋ねますと彼はすました顔で、「米を買ひに行かうと下の谷川のところまで下ると河岸のもとに二三の鷺がおりてゐましたのでこれを取りて今夜の御馳走にしようと思つて只今貴女より頂いたものを投げましたが、うちそらしたので今一つのも投げるとこれもうちそらして鷺は逃げ、金は無くしたので歸つて來ました」と平氣なものでした。此の風情にさすがの娘も驚き如何したものかとあきれ果てゝしまひました。彼は一向すましたのです。

「あんなものは私の此の屋敷には澤山です。家の下にも畠の中にも澤山ころがつてゐる、あんな物は庭の小石だ」

と申します。娘は愈々不思議に思ひ袂明をつけて二人で畠の隅まで行きました。そして一畝堀りますと其下には目もまばゆきばかり山吹色の砂利がざく／＼と出て來ました。どこを堀つても此の通りな

のです。驚いた娘、そして始めて之が黄金だと知つた小三郎は明けの日より二人で此の黄金の砂利を掘り集め山を築いてそれを眺めながら二人は観音様の教示に従ひ幾千代かけて夫婦の契を結びました。そして大きな邸宅を構へて此處に移り平和な家庭を作ることになりました。新妻と二人で家の附近から澤山の黄金を掘り集めて幾山かの黄金の山を築きました後、小三郎夫妻は一旦四丁分から旭野村岩本に移りましたが此の地も鞍ヶ嶽の山麓で萬事につけて不便勝なので色々と住心地よいところを探した結果、菊鹿の平野を一目に見る事が出来る眺望の地「米原」を選んで此處に豪壯なる邸宅を営み多くの召使を伴ふてこゝに移りました。此の事が天聽に達して天子様からは特に長者號を賜りましたので後世、人々はこれを「米原長者」と稱へるやうになりました。

長者は、一千餘の牛馬を飼ひ東は菊池谷から、西は山鹿郡賀茂の浦まで數千町歩の田畑を作つて居ました。

毎日々々五月雨が降り續き梅の實が青い葉蔭に黄熟する頃になりますとあちらにもこちらにも田植歌が賑かに聞えて來ます。見る／＼内にあたりの田の面は青い姿と變つてしまひます。今日は長者のお家の田植をとて綺麗に着飾つた長者の家族は引き連れて山の上にて田植見物。見渡す限りの田圃には歌も賑かに多くの人の手で仕事は次第々々に捗つて行きます。さて長者の田は毎年一日で植ゑ終ることになつて居ります。又一日で植ゑ終るのが此上もない樂みで且誇として居りました。ところが或る

年の事例年の如く早朝から田植を初めましたがか／＼捗らず半分も植ゑ終らぬのに日は西山に入りかけました。長者は残念に思ひ「今日の中に苗を植ゑ終らなければならぬ。さあ今から、お日様を呼び戻さう」と云つて早速立ち上り、日の丸の扇を手取るや山の頂上から傾く夕日をあふぎ戻しました。すると不思議、夕日は竿丈程も後戻り眞晝とまがふ様まばゆき光をさしてあかるくなりました。此の間人夫を勵まして植ゑさせましたが尙終らぬので今度は日の岡山に油三千樽を持上げて之を山に注ぎかけ、火をつけましたから全山火の山となり菊鹿の平野を蓋の様に照しました。そしてやつとの事で數千町歩の田を植ゑ終ることが出來ました。

併しお日様を呼び戻した罪は受けなければなりませんでした其の夜めやしき火玉が飛んで來て長者の家に落ちました。さあ、大變、火事だ／＼見る／＼内に火猛焰々と立ち上り折からの風に吹きまくられて火勢は愈燃え盛つて行きます。然し水の少いあはれさに家は見る間に燃え盡してしまひました「廣い田圃や山や家、澤山持つてる長者様、お家は大きな城のやう、お馬やお牛は數知れず、お倉にや米が一杯だ」村の少女達が歌つて居ましたさしもの大きなをして立派だつた家も倉も悉く焼き盡されてしまひました。其の上長者夫婦も遂に焼け死んだとのことでありました。

それより幾星霜を経つて、黒姪米原のお倉の跡から今日尙此の焼米が澤山地の中に掘り出されます尙此の地より發掘される長者園子（土園子）は此の時奴婢に與へし園子の捨物であると云ひ又現菊池

郡城北村本分の切通しに並んで居る十數体のお地藏様は此の時の田植の晝飯係りであつたとも云つて居り、又米原の村外れの一石には長者の六つの時の足跡があり今日の岡山が禿山なのは其の當時焼土となつてしまつたからだとも云はれて居ります。

かうして此の奇しき長者の傳説は平和な村人達によつて永久に傳へられるのでありませう。

(郷土傳説ノ調ヨリ)

五、菊池氏系圖

(一) 中臣氏系圖

天兒屋根命—天種子命—(十二代略)—鎌子—勝海

—黑田—(二代略)—御食子—鎌足(藤原氏祖)

(二) 藤原氏系圖

藤原鎌足—不比等—(南家)—武知磨

—(北家)—房前—眞清—内磨—冬嗣—良房(攝政)—基經(關白)—

—忠平—師輔—兼家—道隆—隆家(太宰權帥)—良賴—經輔—正則—則隆(菊池氏)

—道長—文時—文貞—秀平(龍造寺)

(三) 菊池氏系圖

第一代

則隆 延久二年菊池下向

第二代

經隆 菊池兵藤警固太郎

第三代

經賴 菊池民部大輔

—政隆—西郷太郎
—保隆—小島次郎

—通俊—兵藤太郎
—僧—安頂意禪師
—經明—合志五郎
—經平—追間十郎

第四代

經宗 菊池太郎 鳥羽院武者所

第五代

經直 菊池七郎 鳥羽院武者所

第六代

隆直 菊池次郎

—經長—天草兵藤大夫

—經家—藤田三郎

—經遠—託摩四郎

—經秀—村田五郎

—經益—井岸六郎

—俊直—東次郎

—經繼—佐野三郎

—經雄—菊池小次郎

—經俊—赤星十郎

—隆長—長野太郎 歿三壇浦

第七代

隆定 菊池次郎 後鳥羽武者所

秀直 砥川三郎 歿二境浦一

直方 合志四郎

隆俊 八代五郎

賢秀 菊池六郎

隆繼 小次郎 先父死

隆親 片角三郎

定基 江良四郎

家隆 大夫五郎

定直 伊倉七郎

隆元 小野崎十郎

隆益 林原與三

第八代

能隆 無次郎 左京大夫 承久亂有レ功

八六

第九代

隆泰 大郎式部少輔

隆政 西郷三郎

隆時 加惠九郎

隆經 城六郎 越前守

實照 本郷四左衛門

隆頼

直隆 刑部丞 早世

僧 覺佛

武房 次郎 元寇ノ時有レ功 贈從三位

直隆 赤星三郎 元寇ノ時有レ功

隆顯 若宮四郎

隆冬 須屋五郎

康成 菊池八郎 元寇ノ時有レ功

重宗 林原與三郎

隆盛 彌四郎 先父死

道武 堀川三郎

武本 甲斐六郎

武成 長瀬七郎

武經 八郎 鳥崎左馬助

武門 追間十郎

十一代

時隆

十二代

武時

次郎 寂阿入道 元弘三年於博多一戰死 贈從一位

第十三代

武重

頼隆

武茂

隆舜

武澄

武吉

武豐

武敏

隆光

武隆

武尙

武義

次郎 肥後守 贈從三位

肥後三郎 從父戰死

本野對馬守

穴圓寺阿日坊 從父戰死

菊池肥前守 從五位下

菊池七郎 於二湊河一戰死

菊池八郎 赤星筑前入道

菊池九郎 掃部助 空阿入道 贈從三位

豐田十郎 肥後守 贈從三位

菊池與一

又次郎 肥後守 從五位下

肥後守

菊池彦次郎 自關入道 於二筑前蟻打一戰死

武安 肥前守 於二筑前蟻打一戰死

武元 守武 安春

武安 第二十四代

武包 宮松丸 肥後守

次郎 肥前守 贈從三位

良政 又次郎

又次郎

又次郎

又次郎

又次郎

又次郎

又次郎

又次郎

又次郎

又次郎

又次郎

又次郎

又次郎

八七

第十八代

肥後守 從四位下

兼朝

武楯 高瀬相撲守

英朝 千田伊豫守

第十九代

肥後守 從四位下

持朝

忠親 新宮次郎

第二十代

大丸 肥後守 從五位下

爲邦

第二十一代

藤菊丸 肥後守 從四位下

重朝

武邦 民部允

第二十二代

宮菊丸 武運 肥後守 從五位下

能運

肥前守

爲安

爲房 託磨大膳大夫

爲光 宇土彈正大弼

相直 木野但馬守

重安 肥前守

第二十三代

政隆 始の名は政朝 肥後守

政隆

第卅九代

第四十代

重次

忠

爲菊池神社宮司

武臣

賜男爵

武夫

六、菊池氏年表

元號	紀元	元曆元
長和	三	一六七〇
寛仁	三	一六七九
延久	二	一七三〇
治承	四	一八四〇
元曆元	三	一八四三

藤原鎌足—不比等

(南家) — 武知麿

(北家) — 房前 — 眞柄 — 内麿 — 冬嗣 — 良房 (攝政) — 基經 (關白)

中平 — 師輔 — 兼家

道隆

隆家 (大宰權卒) — 良賴 — 經輔 — 正則 — 則隆 (菊池氏)

道長

文時 — 文貞 — 秀平 (龍造寺)

藤原隆家 太宰權帥ニ任ゼラル — 三十六歳 (三、二)

藤原隆家 刀伊ノ賊ヲ撃退ス (三、三)

藤原則隆 肥後ノ警固使トシテ菊池郡ニ下向シ深川村ニ居館、初代菊池氏ヲ名乗ル

八月 隆直 賴朝ニ應シ太宰府ニ討入りニ之ヲ燒ク

六月 隆直 上洛、安徳天皇及劍靈ヲ奉シテ九州ニ下ル

菊池氏ノ皇室中心主義ハ此頃ヨリ著ハル

菊池隆直 太宰府行宮ヲ護衛ス (八月)

菊池隆長 備中水島ニ戦死ス

隆直 平家ニ屬シテ安徳天皇ヲ護衛シ奉リ遂ニ壇浦ニ敗戦ス

菊池禮直 壇浦ニ殉死ス (三月)

文治元	四
承久三	三
建長二	二
文永二	二
弘安四	四
正安二	二
正和五	五
元徳二	二
元弘	弘
二正慶二	二
建武二	二

一八四五 島津忠久、日薩隅ノ三州ノ守護職トナリ、島津氏六百年ノ基ヲ開ク
 一八六一 菊池民一族北條軍ヲ宇治勢多ニ防ク(五月)
 一九一〇 隆泰ノ代菊池家ノ所領回復サル
 一九三四 〇十月武房部下五〇〇ヲ以テ元軍ヲ博多ニ撃破ス(十月)
 一九四二 元軍四四〇〇隻ヲ以テ再ビ襲來ス
 菊池武房之ヲ防グ(七月)
 一九六〇 詫間顯秀合志郡吉村ノ田地ヲ賜ハル(十月)
 一九七六 武時山鹿郡日輪寺ヲ興修ス(七月)
 一九九〇 大智禪師鳳儀山聖護寺ヲ開ク
 一九九二 〇博多合戦
 一九九三 武時舉兵護良親王ノ令旨ヲ奉シテ九州探題北條英時ヲ伐タントス(三、一、二五)
 武時博多ヘ進出ス(三、三、一一)
 探題邸入門ヲ拒絶サル(三、三、一二)
 武重ハ袖浦ニ決闘ス(三、三、一三)
 午前四時開戦(故郷ニ)
 武時四二歳ニテ戦死ス(三、三、一三)
 其子賴隆等之ニ死ス
 九州探題陥落シ北英時自殺ス(三、五、二五)
 一八九四 十三代菊池武重討襲(肥後國守護職)

延元	一
二建武	二
三興國	三
四	四
興國	興
二	二
三興國	三
四	四
三康永	三

一九九六 〇武重足利直義ノ軍ヲ箱根ニ破ル(二、二、二二) 菊池千本槍
 武敏筑後ニ出テ太宰府ヲ討タントス(元三、七)
 〇多々頁濱ノ戦官軍敗ル(元三、三) 島ノ栖原會戰(元、四、一三)
 筑後床河城(元五、一) 平塚會戰武敏菊池ニ退ク(元五、一六)
 武重尊氏ト兵庫ニ戦フ。武吉湊川ニ自刃ス(元五、二五)
 西征將軍懷良親王御派遣ノ繪旨九州ノ官軍ニ下ル(元六、一八)
 一九九七 武重、武敏寺尾野城ニ旗ヲ掲グ。武重、一色氏ヲ犬塚原ニ合戦ス(三、四、一九)
 武重合志城以撃ヲ決行ス(二、六) 阿蘇太宮司ヘ繪旨下ル(二、二、一六)
 武重隈府城ヲ本城トス
 一九九八 少貳頼尙九州ヘ着ス(三、一) 武重一萬餘騎ヲ以テ筑後ニ進出ス(三、一)
 少貳頼尙石垣山ヲ功撃ス(三、三、三)
 武重少貳ノ兵ヲ玉名郡不ノ葉ニ撃退ス(三、四、八)
 〇武重家憲ヲ制定ス(三、七、二五)
 武重甲斐ノ重村ヲ鞍嶽山麓ニ撃破ス(三、九)
 一九九九 〇吉野ノ悲報來ル(五、八、一六) 久米安國寺成ル
 武重先帝ノ佛事ヲ行フ(四、二、二二)
 武重卒去
 二〇〇〇
 二〇〇一 少貳頼尙菊池氏ヲ討タント九州ノ武家方ニ召集令狀ヲ發ス(二、六、三)
 二〇〇二 武士起請文ヲ認メテ血判ヲナス、武重ノ家憲第二條政道ニ關スル細則(三、八、一〇)

興國 四	二	二〇〇三	鞍嶽ノ會戰：菊池軍大友軍ヲ破ル（四、三、二五） 穴川口ノ會戰 菊池軍ヲ擊退ス（四、五、八） 武光益田口ニ戰フ（五月） 武光阿蘇惟光ヲ由口ニ伐ツ。武光合志幸隆ヲ深川ニ破リ隈府本城ニ入ル 武士職ヲ勇退シ諸國修校ノ途ニ就ク時ニ二十一歳（五、一、三） 十五代菊池家封襲……從四位ノ下ニ叔セラル 菊池武光正觀寺ヲ建ツ
正平 三貞和 四	五	二〇〇八	◎征西將軍ノ宮菊池ニ入城。コ、ヲ九州鎮定ノ本城ト定メ給ヒ以後二十年征西府ヲ置カ ル（三、一） 今川五郎直貞川尻ヲ發シ肥前ニ入り武雄ニ根據ス（五、三） 大智禪師廣福寺ニ移ル（時ニ六十二歳） 武光親王ヲ奉シテ直久征討ノ準備ニカ、ル（六、九、二） 將軍宮直久征討ノ爲筑後ニ兵ヲ進メ給フ（六、九） 一色範氏ハ少貳頼尙ヲ太宰府ノ原山城ニ降ス（七、二） 直久九州ヲ逃レテ長門ニ入ル 武光一色軍ヲ太宰府南ノ針摺原ニ破ル（八、二、二） 武光肥前筑前へ進出ス（五月） 武澄島原ノ多比良城ヲ降ス（九、九、九） 武光筑後、筑前、豊前進出
觀應元	六	二〇一〇	
六 二	二	二〇一一	
七文和	七	二〇一三	
八 二	八	二〇一三	
九 三	九	二〇一四	

一〇 四	二	二〇一五	武澄親王ヲ奉シテ千葉氏ヲ伐チ肥前ノ小城城ヲ降ス（一〇、八） 武澄豊後大友ヲ降ス（一〇、一三）
二 延文	二	二〇一六	菊池主水正一色軍ヲ麻生山ニ擊破ス（一〇、一〇、二六） 一色範光九州ニ斷念シ歸洛ス 菊池武澄肥前、筑前、豊後、豊前進出一色範氏ヲ九州ヲ遁ル（十月） 大友氏反ス（三、一九） 武光日向ニ入り畠山直顯ヲ三股城ニ降ス（一三、一〇） 武光親王ヲ奉シテ志賀氏房ヲ豊後ニ攻ム（四、三） 五月凱旋ス 武光四萬ヲ率ヒテ菊池ヲ發ス官軍筑後川ヲ渡ル（四、七、一九） ◎兩軍十萬筑後川ニ會戰ス（激戦十時間）死者二萬五千（四、八、六） 足利義詮ハ菊池氏討伐令ヲ大友氏ニ下ス 武光ハ武安ヲシテ肥前討伐ヲ行ハシム（一五、一） 足利義詮斯波氏經ヲ九州探題ニ任命ス（一五、三） 武光親王ヲ奉シテ薩摩征伐ヲ企ツ（一六、四） 氏時豊後筑城ニ督ス。阿蘇惟村少貳ニ應ス 武光太宰府ヲ陥ル（一六、七） 武光天拜山ヲ陥ス（一六、八） 氏時菊池氏討伐ヲ阿蘇惟村ニ促ス（一七、二） 武光豊後ニ侵入ス（一七、八） 武光武義斯波氏經ノ軍ヲ柏屋ノ長者原ニ破ル（一七、九、二） 武光、少貳ヲ白杵城ニ攻ム（一七、一三）
一五 五	三	二〇一〇	
一六 康安	四	二〇一一	
一七 貞治	五	二〇一三	

建	德	應	安	元	九	八
二	三	三	三	三	三	三
四	三	二	六	五	四	三

1011 菊池武朝生ル。大内弘世氏經ト計リ門司城ニ入ル。
 菊池武勝弘世ノ軍ヲ虜屋ノ馬岳城ニ破ル。
 阿蘇惟澄病没ス(二九、九)……(宮方)
 1012 河野道兼船籠(二八〇隻)ヲ率テ九州ノ官軍ニ降ル(二〇、七)。
 將軍義詮ハ澁川義行ヲ九州探題ニ任ス(二〇、八)。
 1013 島津義久肥後侵入ヲ企テ失敗ス(二、四)。
 大智禪師七七歳ニテ示寂ス(二、一〇、一〇)。
 1014 村上天皇第六王子良成親王征將軍トシテ下向(五歳?)。
 懷良親王武光以下七萬騎ヲ以テ東上ニテ途ニツキシモ大内義弘ノ兵艦ニ防ケラレテ失敗ニ歸ス(二、三、二)。
 1015 河野氏伊豫ニ侵入シテ四國經營ニ着手ス(三、六)。
 懷良親王(父帝三三、回忌)法華經ヲ寫シテ阿蘇社ニ奉納ス。
 明ノ太祖ヨリ倭寇禁壓ノ聖旨ヲ我西征府ニ送ル……親王拒絕サル。
 菊池武政明使趙姓ヲ斬ル。
 西征府ノ全盛時代來ル……親王在職十二年。
 細川頼之今川了俊ヲ拔擢シテ九州探題トナス(元、九)。
 1016 今川了俊九州探題赴任ノ途ニツク(三、二、一九)。

文	中	和	永	天
三	二	三	二	三
五	六	七	六	七

1017 阿蘇惟村今川氏ニ從フ(二、六、二五)。了俊豊後ニ上陸ス(二、七、二)。
 菊池武政豊後ニ入りテ形勢ヲ偵察ス(二、七、二六)。
 八月ヨリ翌文中元年ニ至ル間菊池今川ノ兩軍會戰百餘度ニ及ブ。
 今川仲秋肥前ノ呼子港ニ上陸ス(二、二、一九)。
 武政、今川軍ト肥前馬帽子嶽ニ會戰シ太宰府ニ退ク(元、二)。
 今川了俊少武大友ヲシテ筑前麻生山ニ官軍ヲ破ラシム(元、三、一〇)。
 武政今川軍ヲ酒見城ニ攻メシモ成ラス太宰府ニ退ク(元、八、四)。
 太宰府總攻撃ヲ開始ス(元、八、一〇)。天山城及有知山城降ル。
 太宰府陥落ス(元、八、二二)。
 菊池武光卒ス(十一月)。
 十六代菊池武政封襲(守護職ヲ繼グ)。
 武政高良山ニ陣没ス(三、五、二六)。
 十七代菊池武朝封襲(守護職ヲ繼グ)。
 武朝高良山ヨリ退キ隈府城ニ立籠ル(三、一〇)。
 今川軍肥後ニ侵入ス(三、二)。
 懷良親王、良成親王ニ職ヲ讓リ矢部ニ御醫退遊サル。
 水島ノ合戦武朝今川軍ヲ撃退ス(元、九、八)。
 1018 蟻打ノ激戦菊池軍敗ル(三、一、一三)。武義武安阿蘇惟武戦死ス(二月)。
 玉名郡白木原ノ戦、菊池軍敗ル(三、八)。

文正元	三三七	二十一代菊池重朝封襲(守護職ヲ繼ク)從四位ノ下ニ叙セラル(十七歳)
文明四	三三三	隈部忠直ト計リ孔子堂ヲ建テ孔子像ヲ祭ル(四、二)
八	三三六	重朝連歌一千句ヲ藤崎八幡宮ニ奉納ス(八、三、一四)
九	三三七	京都南禪寺ノ桂庵和尚菊池ニ來リ落學ヲ講ズ
三	三三九	孔子堂ニ釋奠ノ禮ヲ行フ
一六	三四二	隈府ニ於テ月松ノ聯歌會ヲ催サル：一日一萬句(三、八)
一七	三四四	重朝宇土爲光ヲ木原ニ破ル
二	三四五	菊池(重朝)阿蘇軍ト矢部ニ戰テ敗ル
二	三四八	菊池爲邦卒ス(十月)
二	三四三	重朝病没シ玉祥寺ニ葬ル：四五歳(一、一〇、二九)
元	三六一	二十二代菊池能運封襲(守護職ヲ繼ク)十四歳從五位ノ下ニ叙セラル 宇土爲光隈府城ヲ陥ル(元五、三)

米良落

能運島原ニ逃ル(元、二、二〇)嫡子重爲ハ一家臣ト共ニ日向ノ米良山中ニ逃ル
 重爲(重次)―重種：其弟重治―重鑑：其弟重良―重隆：其弟重李―則隆―則重(以下代々米良主膳ト通稱)―則信―則元―則純則敦―則順―榮叔―忠―男爵菊池武臣
 現男爵陸軍中將菊池武夫

永正元	三三三	菊池能運島原ヨリ歸リテ爲光ヲ破ル
二	三三四	菊池能運卒去：正觀寺ニ葬ル(二十五歳)(元、二、一五)
二	三三五	二十三代菊池政隆封襲守護職ヲ繼グ(十四歳)(元、三)
六	三三九	菊池家ノ重臣八十四名ハ政隆ヲ追ヒ阿蘇惟長ヲ迎フ(二、二、三)
一七	三三六	惟長ハ菊池武經ト改名ス
天	三三八	菊池ノ重臣ガ阿蘇家ノ外交手段ニ籠絡セラレシハ遺憾ナリ
文	三三九	久米原ノ戰(六、八、七)政隆大友軍ト戰ヒ安國寺ニ自殺ス(十九歳)
	三四〇	二十四代菊池武包封襲(守護職ヲ繼グ)
	三四二	菊池ノ重臣武經ヲ追ヒ託磨家ヨリ武包ヲ迎フ：菊池系統最後ノ守護ナリ
	三四三	大友重治隈府城ヲ落シテ武包ヲ追フ
	三四四	重治名ヲ菊池義宗ト改メテ玆ニ居城ス
	三四五	菊池武包島原ニ卒去ス(元、二、三)菊池氏ノ回復遂ニ成ラス
	三四六	延久二年則隆入國ヨリ四百六十三年ニシテ守護家滅亡ス
	三四七	大友義宗(菊池ニ入りテ菊池義武ト稱セシガ)隈府ヲ去ル

本表ニハ大友家ヨリ乘込メル義武、宇土家ヨリノ爲光、阿蘇家ヨリノ武經モ正統
 ナラサルヲ以テ代數ヨリ除外シ菊池家正統ノミヲ二十四代トセリ

昭和十四年六月一日印刷
昭和十四年六月七日發行

編輯兼發行

熊本縣立菊池高等女學校々友會

熊本市京町本丁六九番地

印刷者

稻本新吾

熊本市京町本丁六九番地

印刷所

稻本報徳舎

終

